

90分デート会話教材

～真似して会話スキルUP～

ジゴロパンダが、地下鉄の構内にある図書館に本を借りに行ったときに、タイプの女の子を見つけたので声を掛けたときの音声。その帰りに2時間程度は時間があつたので、そのままカフェで一緒にお茶をすることにする。

この音声で「初対面の女性から仲良くなる流れ」「空気感」「会話の雰囲気」を味わってください。特に意識して聞いて欲しいのは、

- 「会話での楽しい雰囲気構築方法」
- 「初対面で一気に距離を縮める会話術」
- 「声のトーンやリアクション」

といった部分に集中して聞くと学びが大きいと思います。



上の画像のような女性とすれ違ったので声を掛ける。イヤホンをしていて、
女の子っぽい顔立ちで、ファッションも女性らしい雰囲気だと認識してから声かけ。

まず、女性に声を掛けるときの3つのポイントを紹介します。

【声かけの成功ポイント1】

声を掛けるときは相手女性と「**アイコンタクト**」ができて、声を掛けている男性の全身が見えるポジションが理想的。そうした方が「声を掛けられている」と女性側も認識をするので反応が良くなります。

【声かけの成功ポイント2】

ナンパをする側ができるだけ「楽しい」「嬉しい」といった気持ちで声を掛けて、それで「**自然な笑顔**」を声を掛けたタイミングでできていれば、女性側も自然と楽しい雰囲気に巻き込まれるからために反応が良くなる。

【声かけの成功ポイント3】

声を掛けるときは「**カバンを持っていない側**」からの方が反応が良くなります。そちらの方が警戒心が弱い傾向があるために成功率が高まります。

※当たり前だが、ナンパをしてくる男性に対して女性は「**警戒している**」ので、それを少しでも減らす工夫をすることで成功率は高まっています。

これを意識しているかどうかで大きく成功率が変わります。

ここから声かけ音声になります。黄色ライン部分が解説です。

「声かけ音声」と一緒に聞いてもらえると学習効果が高くなります

※「ジ」はジゴロパンダの略。「女」は声を掛けた相手の女の子の略。

ジ「おい、何聞いてんの？」

※女性がイヤホンをしていて何かを聞きながら歩いていたので、
こういう声かけの言葉になっています。

また、出来るだけ明るく楽しい気持ちで声を掛けると女性の反応が
良いです。

女「(笑)」

ジ「誰？ ジャニーズ？ ジャニーズじゃない？」

※ジャニーズを聞いているの？ という意味で発した言葉です。

女「(笑) いやいや」

ジ「何してんの？ おれ、今図書館行ってきた帰り」

※「自分自身がなにをしているところか？」という状況説明をしっ
かりと伝えることで、少しでも「怪しさ」を消して「安全性をアピ
ール」するためのトークです。

女「あーそうなん？」

ジ「なんか歩き方キレイな子だなと思って」

※笑いを取ることを狙い、褒め言葉も入れて、声を掛けた動機を入
れたトーク。

女「(笑)」

ジ「何してんの？ どこ行くの？」

※これは絶対に早い段階で挿入した方がよいトーク。

1：相手の状況を知ること「連れ出し先」の提案に使うため

2：相手が答えることで、早い段階で「断わる理由」を一つ潰すた

め

女「帰るっかなって思って…」

ジ「帰るの？早いじゃん（笑）。門限ある？」

※これは鉄板のトーク。「帰る」「急いでいる」などの時間に関する言葉が出てきたら、それを笑いを入れて切り返すトーク。

「門限ないなら一緒に遊べるよね」といった風にも頻繁に使う。

女「いや…」

ジ「キレイな二重やな。言われたい？パッチリ二重。整形？」-①

※これは女性をいじることで女性を主役とする「スポットライト」を当てるトークで女性からの反応を引き出すトーク

女「いや…」

ジ「（笑）あ、いじってないか」-②

女「はい、なんも（笑）」

ジ「まあいじらなくていいね。小動物的な…モテそうやもんな」-③

※1～3は最初から女性の反応をある程度を予測してのセット会話になっています。「整形していない」というのをわかっていながらからかって、「いじらなくてもモテそう」とフォローを入れていきます。「いじる ⇒ フォロー」は鉄板の流れです。

女「いやいや（笑）」

ジ「ちゃうの？何、札駅から？」

女「いや、違う。宮の沢」

ジ「宮の沢って何線だっけ？おれそんなこっち来て長くないから分からん（笑）」

女「東西線」

ジ「あ、東西線か。このへんだとこっちから行けるんだ。そっちからかと思った

。何だ、帰るだけなの？よし、じゃあ何か…喉乾いた！（笑）」

※ジゴロパンダ自身が「喉が乾いたからお茶に付き合っただけ」という理由を与えるためのトーク

女「え？（笑）」

ジ「コーヒー飲みに行こ、そこへ」

※一緒にお茶をしたりする場所を明確に提示することで「安全」ということを納得してもらおう。いきなり知らない男に声を掛けられたので、「なにをされるんだろう」と不安だからこそ、明確に「お茶をする」というイメージを植え付ける。

女「え？（笑）」

ジ「そこそこそこそこ」

※いきなり声を掛けてきた男なので、女性は「何が目的だろう」とわからずに不信感を抱く。そのネガティブな感情を少しでも消すためにここでは「目の前にあるカフェ」を指定しています。一緒に何をするのかを具体的にイメージした方が人は行動に移しやすいです。

女「いやいやいや」

ジ「そこそこそこそこ。帰って何かあんの？用事」

女「まあ一応・・・」

ジ「絶対ないじゃん（笑）」

※ナンパは基本的に「女性は断る」という前提があるので、その断る理由を潰していくことで一緒に遊んだりすることができる。ジゴロパンダの「帰って何かあるの？」というトークも事前に「なにをするの？どこ行くの？」というトークで、女の子から「帰る」という情報を引き出していたから使える。

女「（笑）」

ジ「絶対ないよ、今の感じ。構ってよ、友だちいなくて仕方ないんだよ（笑）」-①

※これも頻繁に活用するセット会話。自虐ネタとして笑いを生みつつ、「ジゴロパンダが友だちがいなくて可哀想な男だから一緒にお茶をしてやる」という理由を女性に与えるトーク。あと、笑いにも繋がるので効果的。

女「いやいやいや」

ジ「友だちいなそうやる（笑）」-②

女「いや、そんなことない」

ジ「じゃ、30分だけ。お茶1杯飲んでね、つまらんかったら帰っていいから（笑）」

※交渉のハードルを下げるというのは非常に有効なトーク。

一緒にお茶をする流れになったら、時間は関係ない。この女の子もお茶をした後は、この後も遊んで欲しそうな雰囲気を出していた。

女「お金、あんまりないんですよ」

※あまり、高いものでなければ予算に応じる。この女の子は18歳で若いので、お金ない可能性も実際にあったので「お茶くらいなら」と奢った。

ジ「いや、コーヒーぐらいおごるよ（笑）」

女「（笑）」

1分45秒

※今回は連れ出しまで早い方。大体は3分前後というケースが多い。タイプの女性ならば5分~10分粘って連れ出すこともある。

ジ「じゃあ問題ないな。じゃあもう解決だ。行こ（笑）。何聞いているの？そういえば」

※ナンパで一緒に遊ぶ女の子を作りたいなら、多少の「強引さ」は必要だ。これがないと一気に成功率は下がる。女の子は基本的にナンパには、よほどのイケメンとかでタイプじゃなければホイホイと付いてこない。

女「AAA（トリプルエー）です」

ジ「あー、もう何曲かしか知らん」

女「あーみんな多分そんな感じですよ」

ジ「何の曲？アルバム？」

女「いや、新曲です。最近の」

ジ「あ、じゃあ相当好きじゃん（笑）」

女「（笑）そうです」

ジ「なんだっけ、恋音となんだかっていうのしか・・・」

女「ああーみんなそれぐらいしか知らない（笑）」

ジ「それぐらいしか知らないおれも（笑）。じゃ、ライブとか行くぐらい好きなの？」

女「はい、行きますよ。好きなんで」

ジ「これ、どこから入るの？」

女「いや、分からないです。初めて入るんで」

ジ「おれも初めて入る（笑）。なんか最近できたんだなーとか思いつつ」

女「ああーそうです」

ジ「そんな好きなんだ。全国追っちゃうんだ。あ、こっちカフェってわけじゃないんだ。あ、こっちがオツケーだよみたいな。ああ、中空いてるね。そんな貧乏なの？」

※このように、基本的には女性のことを主役に会話をしていきます。人間は基本的に話したい生き物なので楽しんでくれやすくなります。そして、自分のことを話すと警戒心も自然と解けていきます。

女「うち給料前で・・・」

ジ「ああーそうなんだ（笑）。ライブ行き過ぎた？」

女「いや、ライブ行きすぎじゃない（笑）・・・飲みに行きすぎて」

ジ「ああ、酒好きなん？」

女「いや、好きじゃないんですけど、みんな違う友だちとかが多くいるから・・・」

※こうやってどんどん女の子の情報が増えてくるので会話のネタにも困らなくなります。

ジ「ああ、お誘われが多いんだ」

女「そうなんです（笑）」

ジ「あれ、3月の最後だから？」

女「あ、どうなんだろう。結構みんな、『今日ヒマ？』みたいな感

じで」

ジ「あ、友だち多いんや」

女「（笑）」

ジ「うらやましいな（笑）。おれ、ほんま友だちいないからなあ…。ピンク好きなんだね。ピンクでピンクで…ピンクでしょ？」

※女性のファッションにピンクが多かったので、いじっています。ここではカフェのオーダーがあるので深く触れていませんが、女性のファッションを話題にしてあげると盛り上がりやすいです。

女「（笑）」

ジ「まあまあ。…ドトールだよね？」

女「そうですね」

ジ「スタバか？まいいか、今度飲まない？」

女「うーん、スタバのほうが…」

ジ「何にする？」

女「カフェオレで…」

ジ「カフェオレにする？ホット？アイス？アイスのカフェオレ？サイズは？L？」

女「いや、Mでいいです（笑）」

ジ「（笑）さすがにデカイか

店員「お会計は別々になさいますか？」

ジ「あ、一緒にいいですよ。カフェオレ？カフェオレのアイス…ハニーしかないよね。これでいい？アイスハニーカフェオレのM二つ」

※店員への対応はできるだけ「丁寧」にした方が良いです。女性の印象が変わります。多くの女性は定員への対応が横暴だと一気に冷めます。ジゴロパンダも店員に「ありがとう」という言葉は欠かしません。本当は敬語の方が良いです（笑）

<店員と対応>

ジ「あ、ストローとかいる？ストローはあるのか。あ、もういらねえか。ハニーいうから」

女「甘い・・・」

ジ「タバコは吸う人？」

※こういった細かい配慮は聞かれる前にすることで、相手女性が「気遣いできる人」という印象を持ってくれます。気遣いは予測して、先に行うのが正解です。先に「リード」というのが重要です。

女「いや、吸わない」

ジ「おれも吸わないからいいや。そっちにしよう。ここでいい？」

女「ううん、隣・・・な感じ（笑）。隣な感じだから、ちょっと離れ・・・くっつき過ぎですよ（笑）」

※これは冗談でイスを近づけました。また、ここの店舗は大きなテーブルに10人程度が座るタイプの席しか空きがなかったために、隣に座ることになりました。パーソナルスペースの関係で、お互いの距離感としても「横並び」の方が仲良くなりやすいです。

ジ「ゴロパンダは人見知りなので、横並びの方が好きです（笑）」

ジ「（笑）なんか対面もアレだなと思って。対面緊張しちゃうから」

女「いやいやいや（笑）」

ジ「なんで？なに否定？」

※「ナンパしているんだから人見知りな訳ないじゃん」という女性のリアクションでしたが、こういう細かいのも全て拾ってあげることで会話のテンポが良くなります。これも狙った反応です。

女「（笑）」

ジ「はい」

女「あーありがとうございます」

ジ「いえいえ。はい、プレゼント」

※注文したコーヒーを渡しただけです。それにユニークな会話を被せています。こういう積み重ねで楽しい雰囲気を作りやすくなり

ます。

女「（笑）」

ジ「びっくりした？」

女「いや、ほんとに（笑）」

ジ「誰コイツって」

女「えーとか思って（笑）」

ジ「何だろうな…おれもびっくりしたわ（笑）。衝動にかられた（笑）」

※ここは色恋（好意を伝えていく口説き方）を掛けていくなら、「衝動にかられた、マジでタイプでさ」というトークもアリです。ただ、ナンパでいきなりは信用されないので、こういう好意を伝えるトークを積み重ねていくことで効果を発揮します。つまり、口説き方の流れ作りです。また、こういう好意は冗談っぽいトーンで伝えないと不自然な会話になります。

女「（笑）」

ジ「学生？」

女「いや、フリーターです」

ジ「あーそうなん。学生なんてこんな派手なの付けないわな。混ぜるタイプ？あ、下に…何コレ。ハニーとか牛乳と蜂蜜…甘党っぽいもんね」

※レットル会話です。女性のことをこちらの主観で決めてしまいます。女性の性格を指摘することで、相手への理解を示しつつ会話をリードできます。

女「いや、甘いのが好きなので（笑）」

ジ「でしょう。そんな顔してる。おれもメッチャ好き、甘い。太っちゃう…メッチャ甘！思ったより甘くない？」

女「いやまあ確かに。結構普通に甘いです」

ジ「メッチャ連絡くるの？」

※本当はこのまま「甘いもの好き」で共通点を示して距離縮めを狙いたかったのですが、携帯が鳴っていたので、そちらを指摘。

女「いや、今の友だちのタイムラインにコメしちゃったから（笑）」

ジ「あ、返ってきたんだ（笑）タイムラインやから…LINEか？」

女「そうです」

ジ「最近気づいたんだけどAAAってイケメンが多いんやな？」

※甘党好きで会話を進めるのも良かったですが、恋愛話に持っていくとしたので、好きなAAAの話題にしました。

女「まあ、そうですね。いや別に人が好きってわけじゃないんですよ」

ジ「歌が好きなの？」

女「そうです。基本。あと女子メンバーは可愛いから」

ジ「おーなんかオシャレやな。最近て感じるもん」

女「（笑）そうなんですよ」

ジ「爽やか系やん」

女「そうですね」

ジ「爽やか系が好きなの？」

女「いや、うちは基本かわいい人が好きやから、そんな爽やか系とか…」

ジ「爽やかとかかわいいと近くない？そうでもない？（笑）EXILE系は嫌いだ？」

女「そうです。あんま好きじゃないです」

ジ「今までの彼氏って、どっちかって言うとかわいい系なの？」

※こうやって質問を入れて、会話をリードしていくと女性にストレスを与えずに会話に入っていけるので、男性に対して「話しやすい人」という印象を抱いてくれるようになります。

女「うーん（笑）いや…そんなこともないです（笑）」

ジ「おっさんにモテそうだよな、でもね」

※「オッさんにモテそう」というのも頻繁に使うフレーズです。

なぜなら、ほとんどの若い女の子はオジさんにチャホヤされるから（笑）

この子は中年の男性との接触がまだ少ないために、こういった微妙な反応になってしまいました。

女「そんなことも…いやーどうなんだろ（笑）分かんないです。

おっさんとか関わりないから（笑）」

ジ「あ、そう？なんかおっさんにモテそうな顔してる。優しそうな顔してるやんか」

※「優しそうな顔」しているとか、さりげなく褒めていくくらいが調度良いです。あからさまだと胡散臭くなります。

さりげない褒め方で、本心から褒めるのがベストです。

女「おっさん、そんな話しかけてこないですよ」

ジ「あ、そうなん。若い人に結構話かけられる？」

女「いやでも、夜すすきのにいたら、基本みんなかけられるじゃないですかね」

ジ「あ、そうなん？夜出歩かんから」

女「あー」

ジ「夜眠くて無理や（笑）」

女「いやまあ確かに。基本あんま出かけないし」

※「引きこもりなの？」とインドアな趣味を探るトークにいった方が良かったです。自分の話にいったのは失敗です。

ジ「住んでるのすすきのなんだけどね」

女「え、そうなんですか？（笑）」

ジ「そうそう。豊水すすきの？」

※自己開示をして、多少は自分の個人情報を与えることで、安心させることを目的としています。

女「ああー」

ジ「そう、あっちのほう。あっちのほう意外と静かだよ。川のほう」

女「ああ、住宅街ですね、結構」

ジ「そう。近くもなんか飲み屋あるけど、大人趣味みたいな」

女「あーなるほど」

ジ「そういう感じの飲み屋ばかりで。ガッツリ働いてるの？」

女「そうですね。基本、週一ですかね、休みは」

ジ「メッチャガッツリやん。今日はたまたま休みだったの？」

女「いや…」

ジ「仕事終わり？」

女「仕事終わりです。うち、今日1時に終わったんですよ。なんか4月結構暇なんで、なんか…朝から昼までぐらいです」

ジ「ふーん、3月が忙しいんだ。やっぱり」

女「そうですね」

ジ「へえー。服装も春になってきたしな」

女「(笑) そうなんですよ。でも寒いんですよ、まだ」

ジ「(笑) なんか難しいよな」

女「(笑)」

ジ「そうなんですよ…。だいたい遊ぶのこの辺だ？」

女「そうですね。大通とか」

ジ「あそこの図書館行ってきたよ。なんか…分かる？」

※図書館帰りでナンパをしに街に出てきた訳ではないのを伝える会話。偶然、タイプだったから声を掛けたという動機の説得力を高めるための布石になります。

女「ありますよね。行ったことないけど」

10分

ジ「鞆なんか本でメッチャ重いやんか、ほれ。本だらけ。

恥ずかしいから見せへんけど」

女「(笑) 何でそんな…」

※ボケて、ツッコミを入れてくれる関係にしていくと距離感を縮めやすくなります。まだ、距離感が遠いと判断。

ジ「何やる…。歴史とか好き？あんま好きじゃないか」

女「あんまり…。友だちが結構好きな人もいますけど…」

ジ「女のｺ以外多くない？なんかね、戦国武将好きみたいなの」

女「ああ、いますね友だちに」

ジ「意外とそうかなと思って話題を振ってみたけど、あんまだったな・・・」

女「（笑）そんなに・・・うちは好きじゃないかな」

ジ「AAAにゾッコンなの？他に何も無いの趣味とか？」

※女性のより強い反応を示してくれる話題を探るための質問。

女「基本ないんですよ。普通に音楽聴くのは、まあ誰が好きってわけでもないけど、なんか普通に曲がいいなって思ったものは取るみたいな感じで、それで聞いているから。音楽は好きなんですけど」

ジ「聞く専門？」

女「そうですね。基本」

ジ「ライジングサンとか行かんの？あれ、そろそろだよな？6月とか5月だよな？」

女「そうですね。行かないですね」

ジ「ああいうの行かないんや？」

女「うーん」

ジ「大変そうだよな。なんかね。みんなさ、結構本格的じゃない？」

女「いや、確かに（笑）」

ジ「えーそこまでみたいなの。泊まりで行くんでしょ、あれ。2泊3日とか。なんかキャンプみたいなの感じで」

女「たぶんそうですね」

ジ「そうだよな・・・。なんか昔・・・おれ、麻布住んでたやんか。何年前に、3年～4年ぐらい前か。で、最近また戻ってきたんやけど、あっちからだとならライジングサンに行くバスみたいなのがあってさ、みんなガッツリ、バックパッカーみたいなのすごいでかいリュック持ってさ。こんなガッツリ行くんだと思って。みんなヘトヘトの顔して帰ってくんだよな（笑）。そこまでみたいなの。そんなに・・・」

※ライジングサンという北海道で大きな音楽イベントです。

女「でも楽しいんですかね？」

ジ「楽しいんじゃない？やっぱり好きな人って。海外とか1週間とかで行くよね」

女「ああー。楽しそうですけどね。今、うちはいいかな別に（笑）」

ジ「けっこう根暗な性格だからあんなにはしゃげないよ」

※親近感を抱かせるための自虐ネタです。ただし、やり過ぎるとネガティブな印象を与える可能性もあるので、多用は注意が必要です。

女「（笑）」

ジ「はしゃげる？ライブとか行ってさ、前のほうとか行ったらはしゃいでる人、後ろで静かに見たい人がいるやんか。どっち？後ろ側？」

女「いやまあ、基本そんなに騒ぎはしないんですけども……」

ジ「おれは前は行けないな。ライブとかできないもん。なんか分かるよな（笑）」

女「近くで見るにはいいかもしれないですけども、騒ぐのはそんな……ないかな（笑）みたいな」

ジ「AAA好きだったら別にビジュアル系とか好きじゃないか？」

女「うーん、そうです。あんまり分かんないです」

ジ「ビジュアル系のライブ、激しいイメージあるから」

女「（笑）そうですね。あれは行ったことないです。さすがに」

ジ「きつついよなーあれは」

女「（笑）全然、一人で浮きそう」

ジ「（笑）間違いない」

※女性の言葉に一つ一つリアクションをしてあげると女性が話しやすくなります。

女「本当に」

ジ「結構モテる人？」-①

※恋愛トークに持っていくのに使いやすいフレーズ。大抵の女性は

「モテない」と謙遜をするので、「～なのに（笑）」とセットで使うことが多いです。

女「（笑）モテないですよ」

ジ「モテない？ぱっちり二重なのに？」-②

女「いや・・・だからモテるってわけではないですよ、別に」

ジ「なんかおっとり系だからモテそうだけだな」

女「あんまり男子と出会いがないですから、そんな」

※この子も若いしルックスは良い方です。イメージとしては高校などのクラスによっては1番。少なくとも3番以内には入りそうなレベルです。れでも、出会いがない女性というのは非常に多いので、積極的に出会いを求めて活動をしていけば、可愛い彼女やセフレは簡単に作ることができます。

ジ「あー、職場もあんまりないの？」

※出会いが多いか少ないかは、恋愛トークとして使いやすい話題の振り方です。

女「そうですね、基本女ばっかだから。いないです」

ジ「ふーん、いないんだ。大体なんかさ、ああいうの行ったら、グループみたく女の子いっぱいいたらさ、1人ぐらい合コン持ってくる人みたいなの・・・積極女子みたいなもの（笑）なんか、いないんだ？」

女「いないです」

ジ「あーいなかったらきついね」

女「そうですね」

ジ「だいたい何か知ってる人の話聞くと1人いる感じで（笑）積極的な女子ってみたいな。やっぱ出会えないよね。おれも普通に働いてると全然ないもん」

女「ほんとないんですよね」

ジ「自分から動かなかったら多分おれ、ずっと独身な気がする（笑）」

※ナンパをする理由を遠回しに伝えています。

女「ええ、うちもそんな気します」

ジ「だよな。普通にしたら絶対出会わないわ」

女「20代では結婚したいんですけど（笑）絶対無理な気がして」

※「出会いがない」⇒「結婚願望のあるなし」といった会話に振っていくのも多用しています。

ジ「何歳まで？25歳までとか？」

女「そうですね。25歳までにはしたいなと思ってるんですけど、
相手がいないからまあ・・・」

ジ「あ、今いないんや」

女「絶対無理ですね」

※「なら、俺と出会ったから安心だ（笑）」といった口説きフレーズを冗談っぽく入れた方が女性を口説きやすくなります。

ジゴロパンダは彼女もいて、録音のために声を掛けたので、女性を求める意識が弱くなっています。ここもミスです。こういう細かい意識が女性に伝わって、最終的な成功と失敗を分けます。

ジ「あと何年猶予あんの？」

女「今・・・3月で20歳になったんですよ（笑）」

ジ「ああー。じゃ全然余裕じゃん」

女「え・・・でも一絶対あつという間に過ぎていく気がして（笑）」

ジ「まあねえ。でも同棲してから・・・1年ぐらい同棲すれば、
なんか結婚的な雰囲気になるやんか。そう考えれば24歳まで。
（笑）あ、こいつだみたいな感じの見つければ」

※「まあね」という部分のように相づちのリズムを変えたりしていくと会話にもリズムが生まれます。感情を込めて会話しているからこそ、こういうリアクションが出てきます。

女「いや、絶対無理ですよ、そなんん」

ジ「どうしたん？（笑）最近何、恋愛しなすぎてなんかアレなん？」

女「（笑）いや・・・ほんとに」

※女性から積極的に話題を出してこない場合は、

こうやって反応の取れる部分をいじって話題をずらすのも有りです。女性のファッションをいじるのは確実に反応が取れる話題です。もっと良かったのは「彼氏とれくらいいいないの？」と踏み込む選択もあったと思います。

ジ「足何？生足？ストッキング履いてる？」

女「いや、はいてますよ。さすがに寒いですよ」

ジ「ああ、ならまだ大丈夫だよ。それ生足だったらほんまに寒いやるなと思って。寒い言ってたからさ」

女「いやあ、さすがに。風ちょっとあって…」

ジ「風強いよね。この辺ね。上出たらメッチャ寒いよ」

女「いや、ほんとに。昨日が一番ヤバかったですよ」

ジ「おれも薄着しすぎたと思って。ミスった。昨日メッチャ寒かったな」

女「いや、そうなんです。雨だったし」

ジ「仕事帰りも雨でびしょびしょになってさ。スーツ」

女「（笑）あー」

ジ「マジ最悪やったわ。…髪ちゃんと染めてるんやな？」

女「3月の最初ぐらいに染めたんですよ。結構ヤバかったんで、色（笑）」

ジ「プリン？」

女「ほんとに。すぐなんかなるから。

でも友だちに染めてもらってるんですよ。いつも」

ジ「あ、そうなん？友だちって美容師さんとかの？」

女「いや、全然何も関係ないんですけど」

ジ「あ、そうなの。上手だね」

女「そうなんです。キレイに染めてくれるから自分でやるよりは全然いいかなと思って（笑）」

ジ「ああー。まあ、自分でやるとね」

女「1回美容室で染めたいと思うんですけどね。でも全然染まなくてメッチャ明るいやつにしても全然…」

ジ「美容室でやったら？」

女「いや、普通に自分で最初染めたとき。えーヤバいと思って。とりあえずメッチャ…いつも使ってた種類と違うやつ使ってみたんですよね。それでメッチャ明るくしたっけ、これぐらい染まったから、まあいっか…」

ジ「結構染まってない？自分でやってる割にあんまり痛んでないね」

女「そうですね。でも結構ヤバいんでね。いや最初もう、すごいサラサラだったんですけど、最近もうなんか（笑）…」

ジ「あ、元がすごいサラサラなんだ？」

※オウム返しで会話を被せていますが「髪はおばあちゃん？（笑）」といったようにユニークな返しをした方が良いと

思います。おばあちゃん、とか年齢を感じさせるネタは20歳とか若い女性だと冗談にもなりますが、25歳とか過ぎて老化を感じる年代の女性になると、人によっては嫌味に捉えられるので注意

女「そうなんですよ。お母さんが…」

ジ「サラサラヘアー？うらやましいな。あ、栗毛なの？」

女「なんか…そうですね。猫毛ってよく言われましたね（笑）」

ジ「顔はパンダ顔なのにな」

女「（笑）」

ジ「あんまカフェ来ない？」

女「あんま来ないです」

ジ「飲みばかり？」

女「たまに…まあ昼間友だちと遊ぶ時にスタバとか行くぐらいで。でも持ち歩きだから、そんな、こんなにこうやって座って話すことはあんまないですね、カフェで」

ジ「落ち着きない感じだ（笑）」

※こういう男性側から笑って女性の笑顔を引き出す「つり笑い」もところどころ使うと楽しい雰囲気を作りやすくなります。

女「(笑) 最近なんか…うーん」
ジ「だいたい遊ぶって言ったら飲みになるの？」
女「そうですね。カラオケとか」
ジ「おー。AAA歌うんやな」
女「(笑) そうですね」
ジ「ずっとこっちの人？」
女「そうです。札幌です」
ジ「20年間？」
女「そうです」
ジ「へー。じゃあ詳しいな」
女「でも…ま、そうでもないですけどね」
ジ「もうこの辺しか分かんない。職場も札幌のほうだからここばかり」
女「ああ、うちも札幌ですよ (笑)」
ジ「ああ、そうなん。住んでるのも、札幌のほう？」
女「いや、住んでるのは宮の沢です」
ジ「ああ、ごめんな」
女「(笑)」
ジ「ボケてるね (笑) さっきからちょっと…おれ、年なんかもしない。宮の沢だと…でもじゃあ、全然普通に楽だよな。地下鉄で札幌のほうだから。札幌あれだ、東西線通ってないもんね」
女「はい。乗り換えあるんですけど、まあそんなに…」
ジ「でも、歩いて5分とかくらいだもんね。だから全然…
このへんが楽だよな、確かに。雪も少ないし。年末ぐらいに来ただけだあんまないもんね。こっちのほうね」
女「いや、そうですか？」
ジ「うん。…実家？」
女「はい」
ジ「おお。じゃあ楽やん。ほとんど遊び賃や？」
女「(笑) とりあえず1人暮らしはあんまする気ないっていうか、

あんま考えてない」

ジ「できない？」

女「なんか…ほんなら誰かと一緒に住んだほうがいいかな」

ジ「寂しがり屋だ」

女「(笑) なんか、怖くないですか？ (笑)」

ジ「なに、ストーカー被害にあったことあるの？」

※質問の答えを予測することで回答をしやすくさせる効果があります。

女「いや、ないですけど」

ジ「なに、何が恐いの？」

女「いやなんか…お化け (笑)」

ジ「あ、お化け？ (笑) 苦手な人や。お化け屋敷入れん…ホラー映画とか無理や」

女「いやほんとに。グロいのと…」

20分経過

ジ「グロいのも無理なん？ゾンビ系も無理？」

女「いや、本当に…全部ダメ。血とかダメです」

ジ「絶対、看護師さんとかなれないな」

女「(笑) いや、そうなんです」

ジ「メルヘンなほうが好きやな」

※極端な方向に話を持っていくことで笑いを生みやすくなります

女「(笑) メルヘンすぎるのも『えっ』て思うけど」

ジ「マイメロとか無理？」

女「いや、それは大丈夫です。サンリオは好きです」

ジ「あ、サンリオいけるにはいける？」

女「全然」

ジ「ちょっと顔マイメロに似てるもんな」

女「(笑) マイメロ…」

ジ「言われたい？似てない？でも」

女「（笑）言われたいですよ、さすがに」

ジ「何に似てるって言われる？マイメロ以外で」

女「何に似てる（笑）・・・」

ジ「パンダとマイメロに似てるなっておれ思ったよ」

女「リスとうさぎはよく言われます」

ジ「あー・・・そう？」

女「キャラクターではたとえられたことはないです」

ジ「（笑）人は？」

女「人？」

ジ「お母さんとかやめてな（笑）」

女「ともちんとかよく言われる（笑）」

ジ「ああー、それは分かる」

女「ともちんとぱるるを足した顔みたいな」

ジ「ああー、目元が似てるな」

※強いリアクションです。リアクションの強弱は身につけた方が会話にリズムをつけやすくなります。その結果、楽しい雰囲気構築しやすいです。

女「でも、ぱるる好きだったら嬉しいですけど、それは」

※この時点で知識がなかったのですが、「じゃあ塩対応？（笑）」といったフレーズを加えると笑いを生みやすいです。

ジ「ぱるる美人やんな」

女「うん。かわいい」

ジ「ともちんなあ、なんかいじってる感じあるから、整形顔ってこと？」

女「整形してないんですけどね、なんも」

ジ「目、パッチリだよな」

女「これもお母さんの遺伝なんです」

ジ「そう、お母さん美人なんや」

女「メッチャ目でかくて。まあ、うちの家族みんな目でかいんです

よ」

ジ「うちと一緒にや」

女「（笑）目、おっきいんですけど」

ジ「二重でかいもんね。うちのも全部・・・」

女「よく女子にうらやましがられるけど、そんな・・・（笑）全然そんな・・・だから二重にするものとか使ったことないから・・・」

ジ「アイプチとか？一切やってないの？」

女「なんも。『それ、どうやって使うの』って言ったら『イヤミか』ってよく言われる（笑）」

ジ「（笑）ツケマとかも、じゃあしないんだ？」

女「いや、しないですね」

ジ「じゃあ、楽でいいね」

女「普通に。目もあんまいじないから」

ジ「じゃあ朝起きたら、ちょっとファンデ塗って眉毛描いて終わり？」

女「いや・・・」

ジ「5分で終わるやん。化粧は」

女「うん、そうですね（笑）」

ジ「あんましてないのか、化粧」

女「うん、あんまり。ファンデとチーク、リップ・・・そこらへんしかしないですよ」

ジ「ああ、いいねえ。スッピン見てがっかりしなくて（笑）」

女「そうですね。基本そのままです」

ジ「顔立ちくっきりな子のがええよな。スッピン見てあれになったら・・・」

女「いや、確かに（笑）」

ジ「ま、男はないもんね。逆に。顔・・・見た目で付き合ってからがっかりとかはね。内面か」

女「あー」

ジ「釣った魚にエサはやらないみたいな話（笑）」

女「内面は…あるかもしれないけど、それはまあ、女子も変わらないと思うけど」

ジ「あ、作るタイプ？」

女「いや（笑）、素ですよ、ほとんど。作ることができなくて」

ジ「ああ、おれも出来ない」

女「（笑）」

ジ「このまんまや（笑）。作る女子どうだろう、見破れないのかな。おれ今まで付き合った人は全員いなかったな」

女「ああーそうですね」

ジ「あった？男で？」

女「いやー何考えてるか分からないとかはあったけど、そんなに…（笑）」

ジ「ほんとに好きなの？みたいな」

※ちょっと口調を変えて女性側の意見を真似してみました。

こういうのも笑いを生みやすいです。

女「（笑）うーん、でも別にそこまではなかったかな」

ジ「ふーん。結構続くタイプ？…（携帯入電）大丈夫だよ、出な」

※基本的に相手の状況を優先させた方が良いです。

出会ったばかりで特に相手の事情がわからないので、

こちらから気遣って配慮します。

女「ずっと…いや大丈夫。いつもだから」

ジ「いつも？」

女「（笑）」

ジ「タイムラインの子？」

女「いや…違う。なんかおばあちゃんがいるんですけど、なんか小学校ぐらい、うちが中学ぐらいまで、家に来てたんですよ。で、一緒に住んでたんです。おばあちゃんとおじいちゃんと、そのせいが抜けないのか寂しいのか分からないけど、毎日電話くるんです」

ジ「おばあちゃんが？」

女「（笑）ほんとに…なんて言うんだろ、心配性って言うのか、寂しがりって言うのか分からないですけど、ほんとに」

ジ「あ、もう今は別々なんだ」

女「そうですね。うちももう…全然高校生だったから、その時。高校生だし、うち弟いるんですけど、弟ももう中学ぐらいだったんで、もう大きいし、もう…そんな兄ちゃんみたいな…感じで」

ジ「寂しいだろうね、いきなりいなくなったから。かわいい孫やって…」

女「（笑）」

ジ「おじいちゃんはおるん？一緒に」

女「いや、おばあちゃんとおじいちゃん一緒に住んでるけど、おじいちゃん、よく遊びに出かけるから、（笑）昼間」

ジ「ああー遊び人なんや。ああーそれで」

女「よく釣りとか行ったり碁行ったりとかするんですよ。囲碁とかやるんです」

ジ「多趣味おじいちゃんや」

女「（笑）だから、おじいちゃんいない時とかかけてくるんですよ（笑）」

ジ「うーん、寂しいんやな」

女「でも、毎日同じ事しか言わないから、もうほんとに。

こっちからしたらほんとうんざりで、誰も出ないときもある」

ジ「同じ事？何を言うの？『元気かーい』って？『大丈夫かーい』って？」

女「（笑）いや、もういっつも聞いてるんだから一緒じゃんみたいな感じで思いますけどね」

ジ「共通の話題とかないの？」

女「ないです。それだけ聞いて安心して切るんですよ、毎日（笑）意味が分からん」

ジ「なんやる、別にちょっとなんか痴呆入ってるとか

そういうのじゃないんでしょ？」

女「そうですね」

ジ「ほーん、そうなんや。うちのばあちゃんは痴呆入ってるから
何言ってるか分からん」

女「（笑）」

ジ「この前帰ったら何言ってるか分からんかったもんな。
ご飯とか多分…カレー作ってあげてん。
ばあちゃんにね。で、カレー作ってあげて、
ばあちゃん結構量食べるんだよね。これぐらいの皿に
ほんと山盛りだよ」

女「へえー」

ジ「ご飯2合ぐらいを食べちゃって、それで食べさしたあとに
片付け終わって、『おいしかったかい？』って聞いたら
『ご飯』って言われて（笑）。『喰ったやん』って言って」

※こういう風にストーリー仕立てで話せる会話ネタがあると、
女性に人間性をイメージさせやすくオススメです。

女「いや、でも…ううん」

ジ「だからボケると大変だなと思って」

女「そうですね」

ジ「うん…食べたかも分からないやろ」

女「えーそんなに食べたら…」

ジ「メッチャ食うよ。おれと食っても吐くぐらい食べてるよ、ばあ
ちゃん。すごいなあ。ボケるとそのへんの機能もなんかね（笑）。
分かんないよね、お腹張ってるとかね。不思議やったなあ。
…O型？」

※血液型は性格分析に使うことができるので聞くことが多いです。

女「いや、AB型です」

ジ「あ、そうなんや。垂れ目の人ってO型って聞いたけど…
ウソか」

女「（笑）AB型ですよ」

ジ「でもO型と思ってO型が違ったらAB型の法則ってあるの
知ってる？」

女「そうなんですか？全然知らない」

ジ「意外にそう。AB型はO型を装うってことかな。
付き合う人は何型が多いとかある？」

女「特にないですね。そんなの。みんなバラバラだった気がする」

ジ「ほー」

女「O型がB型か…どっちか」

ジ「じゃあおれO型やからチャンスあるな」

女「（笑）えーでも気にしたことないんですけど、
そんな…血液型は」

ジ「でも結構性格出ない？」

女「うーん」

ジ「B型の人、結構マイペースで自己主張強いよほとんど。
上のほうから引っ張られる感じが好きなん？」

女「まあ、そっちのほうがいいですね」

ジ「なよなよしてたら無理？」

女「あーそれは（笑）。なんか、どうしていいか
分からなくなっちゃう（笑）」

ジ「（笑）」

女「（笑）」

ジ「二人でどうしていいか分からなくなっちゃうな。
一番続いた人でどれくらい続いたの？」

女「一番続いたので…どれくらいだろう。
1年は言ってないですね」

ジ「うーん」

女「一番短い人で1カ月（笑）」

ジ「おお、超短いな（笑）あっという間だったな」

女「あれはほんとになんかもうさすがに…」

ジ「何それ、どういう経路で付き合ってるの？1カ月って。」

普通のなんか学校とか？」

女「いやーなんかちょっと無理だなと思って。いやーなんたる、
サイトであった人なんですけど…」

ジ「フェイスブックとかそういう？」

女「うん、そうですね。で、何回か会って…」

ジ「付き合わん？って言われたの？」

女「って言われて、普通に嫌いでもなかったからいいやって思って
付き合ったんですけど、すごい束縛激しくて」

ジ「ああ、もう『何してんの？』みたいなの？」

女「(笑) いや、ほんとに。夜中なのに『会いたい』とか
言われて、いや、無理だけどみたいなの。実家だし無理だし、
みたいなの」

ジ「(笑) すごいね」

女「いやーそれでもう無理だと思って、
1カ月の記念日に別れました (笑)」

ジ「記念日だねって言って別れたの？」

女「(笑) いや、記念日だねも、もう言わなかったね。
もうやめようみたいな感じ (笑)」

ジ「あー無理やなって。とりあえず1ヶ月みたいな感じで、
試してからみたいなの。すごいね夜中に。
こっちの立場考えてくれないと」

30分経過

女「そうなんです」

ジ「自己都合ばかりなんだ」

女「そうなんです。ほんと自己中。本当に無理だなと思って」

※大体、女性が別れを決断するときは「女性の立場」を
考えてくれないと不満を抱いてのケースが多いです。

ジ「イケメンやった？ルックスも普通？なんかあんまやし、中身も

あれだしみたいな」

女「（笑）」

ジ「そっか。それはドンマやな」

女「（笑）」

ジ「一番最近のは？」

女「最近もういないですよ。だからその人が最後ですよ」

ジ「ほー、結構前？」

女「去年の5月ぐらいですね」

ジ「あ、1年記念日じゃん、もう少しで（笑）」

女「そうなんです。だからもう・・・」

ジ「あ、本当に出会いないんだね」

女「そうなんですよ。この仕事になってもうほんとに・・・

もうちょっと学生時代に恋愛しとくべきだったって（笑）

ほんとに」

ジ「高校はでも共学？」

女「そうですね。で、専門学校まで行って・・・専門学校の男子も、

だけど・・・そんな好きじゃなかったし（笑）」

ジ「それも1年間だったの？」

女「1年ですね」

ジ「そっか。専門・・・何の専門行ってたの？」

女「製菓っていう・・・調理の」

ジ「ああ。女の子多そうだね」

女「そうなんです。で、製菓のクラスだったので、

男子とか10人いないぐらいで、だから全然ダメで（笑）」

ジ「10人なら微妙だよな。なんか・・・やっぱ20～30人いて

1人じゃないの？」

女「でも、それなんか・・・調理系のほうが男子多かったけど、

そんなに関わりないしみたいな（笑）製菓系の男子は

そんなにいないしなみたいなの、逆にウザイのしかいないし」

※「自己中」「ウザイ」とかで女性の不満な感情が出ています。

これらは弱いですが、こういった女性の感情が出ているのは良い兆候です。女性から感情の伴った言葉がたくさん出てくると少しずつ心を開いている証拠になります。

ジ「ウザイ？（笑）どんなやねんウザイって」

女「だからあんまり…いいやと思って。ここ1年だし、みたいなの」

ジ「いい男探すの難しいよな」

女「いやーそうなんですよねー」

ジ「なかなか難かしいよね。恋愛の相手探すのね」

女「そうなんですよね」

ジ「あんま別に誰でもいいわけじゃないし」

女「友だちとしてはいいけど恋愛はちょっとみたいなのが多くて、周り（笑）」

ジ「恋愛になるとね。結構一緒にいたりするからな。

もうイライラ…あんまストレスかかるの嫌だしね」

女「そうなんですよ」

ジ「年上のほうが、でも好き？」

女「そうですね。下はあんま好きじゃないです」

ジ「年下って言ったら高校生だもんね（笑）。捕まっちゃうよ。下手したら（笑）」

女「タメでもいんですけど、タメもガキっぽくて、ほんとに…」

ジ「うーん…男の20歳はそうやね。過去を思い出しても今以上にひどいわ。うん…大体は。25歳ぐらい？」

女「そうですね。基本それぐらいがいいかな」

ジ「ほうほうほう。よかった、じゃあ25歳ぐらいで（笑）」

女「（笑）」

ジ「そらそやな、年上。おれはもうバラバラやけど。年上の可愛い系？」

女「可愛い…いやどうなんだろう、いや、どうだろう。

タイプとかあんまないんですよね、

そんな。…分からなくて、最近、優しい人ならいいかな

みたいな（笑）とりあえず」
ジ「あー難しいな（笑）そのワード出されると困るよな（笑）
優しい人…すぐ怒ったりしない人な」
女「そうですね、基本」
ジ「AAAみたいな人？」
女「いやAAAは（笑）…中身分かんないですからね、
あの人たちは」
ジ「まあね」
女「見た目しか分かんないし」
ジ「あのボーカル？漫画家のなんか…長身のイケメンみたいなの、
あれがメインボーカルなの？みんなあれ歌ってるの？
何も分かってないんだよね」
女「そうですね。みんな基本歌ってるんで。
メインは西島っているんですけど、
札幌出身なんですよ」
ジ「あ、そうなんだ？」
女「その人がメイン。それと、リーダーがいるんですけど、
その人と女子メンバー」
ジ「ふうん」
女「あと周りはダンス中心な気がする。あとラップの人1人」
ジ「あ、ラップもいるんだ。AAAなんか有名な曲しか
知らんからなあ。なんかみんな爽やかやなと思ってたけど、
それだけ（笑）」
女「そうですね（笑）」
ジ「爽やか系だよ。だよなー。AAAの誰かにいっつも似てるって
言われてたんだけど誰だろうな。誰か似てる？（笑）」
女「誰だろう（笑）」
ジ「似てない？パンダに似てるってよく言われる」
女「（笑）」
ジ「ガチャピンに似てるとも言われる」

女「いや（笑）」

ジ「あ、ミニーちゃん？」

※携帯ストラップがディズニーのミニーちゃんでした。

女「ミッキー」

ジ「ミッキー好きなの？プレゼント？」

女「違う、普通にかわいいから買ったやつ（笑）」

ジ「ディズニーランド？」

女「いや、普通にドンホです（笑）」

ジ「（笑）意外なとこきたな。正規品？これ？見ていい？」

女「普通の・・・普通にミッキーですよ」

ジ「なんかあるやん、中国製のダズニーみたいな（笑）
ディズニーっぽいけどみたいな」

女「なんかあれですよね」

ジ「ダッフィーとかなかった？お祭りとか行ったらさ・・・
なんか正規品って足の裏の形がなんかあるやんか。
で、なんか微妙に違うっていうんで」

女「なんか似てるけど違うみたいなありますよね。
ゲーセンとかにもよくある」

ジ「よくあるある。ダッフィーじゃなくて、
ディッフィーみたいな」

女「（笑）可愛いけどパクリかみたいな」

ジ「そうそう、意外に（笑）なんか騙された感あるよね
そやねんな。なんでもいいっちゃいいやねんけど、
チープ感がなんかな、気分的に良くないよね」

女「そうなんですよ」

ジ「終わるのはだいたい1時くらいなの？いつも」

※仕事の勤務時間帯は会話の流れで聞いておいた方が良いでしょう。

これを把握しておくことで、後日に連絡をする際に、
女性に連絡をする時間帯や返信率が高い時間帯がわかり、
戦略を立てやすいです。

女「いつもなんか忙しいとかになると…4月は暇だから早いけど、基本4時とかかな…朝から4時とか夕方ぐらいまで」

ジ「夕方ぐらいまでなんだ」

女「はい」

ジ「朝早いんだ、じゃあ8時とか」

女「7時なんです」

ジ「あ、朝早いじゃん（笑）」

女「（笑）本当に5時起きなんですよ、毎日」

ジ「じゃあなんか製菓系とか何か作ったりする系なの？」

女「そうです。ケーキ屋さんなんで」

ジ「あ、作るの？」

女「はい」

ジ「すごいね」

女「いや、そんな昔事やってないです」

ジ「女子力高いやん（笑）」

女「全然」

ジ「1から作るの、あれ？」

女「いや、違う…タルトの店なんで。台があって、それは工場から来て、その上になんかクリームとかそういうのを…」

ジ「デコレーション系なんだ」

女「そうです。仕上げとかそこら辺はやるんです」

ジ「じゃ、ほんまお菓子好きで入った感じなんだ。最初は」

女「いや、そんなこの前まで…まあまあ確かに」

ジ「高校生くらいの時に好きで…」

女「なんか親にまず薦められて、『こういうの、あるって入ってみたら』みたいな感じで、全然将来決まなくて本当に。でも就職も高校の時だとなんか早いしなあと思って、とりあえず専門学校1年ぐらい行くって言って…」

ジ「で、考えてみようかな、みたいな」

女「そうですね。まあ、別に作るの嫌いじゃなかったしケーキ

とか、だからまあいいかなと思って入って…。でも普通に
専門学校の実習とかで『いや、もういいわ』とか思って（笑）」

ジ「これ毎日かあみたいな」

女「いやほんと飽きるぐらい作らされたから」

ジ「働いても飽きるぐらい作るもんね」

女「そうなんです。でも無収とかキツいから仕事はしなきゃな
と思って、とりあえず入ったんですけど」

ジ「悩める年頃なんや」

女「でもやりたいこともないし、でも仕事のみんなも雰囲気よくて
好きだから、まあ楽しいし、今はいいかなって。とりあえず」

ジ「難しいよね」

女「一人暮らしするってなったら、またちゃんと働かなきゃいけな
いと思うけど、
今の給料じゃちょっとやっていけないから（笑）」

ジ「まあ、ライブも行けんくなっちゃうからなあ（笑）」

女「なので、わざわざ給料いいところ行かないといけないんです
かね？今はまだ実家だし、まだあんま考えてないんですよ、
ほんと」

ジ「料理は好きなん？」

女「まあ、好き…ですけど、あんましないですけど（笑）」

ジ「家で作るぐらいか？仕事で毎日はね」

女「やっぱり家でなんかオーブンとかなんかなくて、レンジと
オーブン一緒になったやつがあるんですけど、なんか
オーブンに使う鉄板みたいなのがなくて、
なくなったんですよ、急に。エッ？とか思って」

ジ「誰が何をしたん？（笑）」

女「分かんないですよ。急に無くなっててもう使えなくて
レンジしか使えないじゃんとか思って（笑）」

ジ「鉄板泥棒」

女「いやもう本当に。鉄板買わないと何も作れないですよ」

ジ「そんなのあるんだ。レンジの中に入ってるの？

ヘルシオみたいな感じ？」

女「普通に形は電子レンジなんですけど、オーブンのクッキーのタネとか、いろいろあって使えるらしくて。お母さんがよく作ってくれてて、クッキーとかそれで。だから作れるはずなんですけど、でもその鉄板を誰かなくしたから（笑）」

40分経過

ジ「誰かって誰やねん（笑）」

※オウム返しのように言葉を繰り返すのにも、言葉の強さを変えるとバリエーションが生まれやすいです。

女「気付いたら無くなってた。前まであったのになあ」

ジ「結構そう…良さそうな感じ。高いんやろ？」

女「でもだから鉄板だけでも売ってると思うんですけどね」

ジ「取り寄せなきゃいけないの？」

女「多分…」

ジ「ふうん。お菓子作り、結構なんか機材いるんだよね」

女「そうなんですよ」

ジ「本格的になればなるほどな」

女「ほんとに。そういうのもまた高いし、家でそんな作らないし、作っても誰食べるの？ってなるし」

ジ「まあな。彼女に作ってもらって嬉しいけどなあ」

女「（笑）いやまあ、彼氏とかがいたら別かもしれないですけど、あげる人もいないと、友だちといってもそんな。ま、実習で作ったやつとか専門学校の時、でもよくあげたりしてたんですけど、家近いんで」

ジ「バレンタインデーは？」

女「なんかあげてましたね」

ジ「配るんや。友だちとかに」

女「そうですね、結構みんなに配って」

ジ「バレンタインデーな。そういう時はテンション上がるけどな」

※「俺にもお菓子作ってよ、彼氏候補だろ？（笑）」みたいな
プッシュ型の口説きも継続した関係を望むのであれば、
マメに入れた方が良いでしょう。

女「（笑）」

ジ「無駄にホワイトデー頑張ろうかなって」

女「（笑）」

ジ「最近デートしてないん？」

女「デートしてないですね。出会いのない人生だから」

ジ「出会ってるよ」

※「出会いあるだろ？」というニュアンスを伝えています。

女「（笑）」

ジ「（笑）なんで笑う？」

女「いや、急すぎて今日は（笑）」

ジ「いやーおれも急だったわ。帰ろうかなと思ったもん」

女「いや、本当に（笑）」

ジ「おれのマイチャリが止まってるからそこに」

女「（笑）」

ジ「チャリで十分や」

女「そうですね。すすきのに住んでたら全然」

ジ「車持ったらまた邪魔やからな？免許持ってる？」

女「いや、持ってないです」

ジ「どういうデートが好きなん？特にないな？」

女「いやあ、そうですね…でも」

ジ「のほほんデートか、アウトドアデートとか分かれな？」

女「ああーどっちも好きですけどね。うち家ってというかお父さんが
アウトドアの人なんで、よく毎年キャンプとか行くんです
よね。だからけっこう外で遊ぶのも慣れてるし、
家でのんびりするの好きだから、

どっちでも楽しめます。全然」

ジ「キャンプ行ったことないなあ。彼女と行ったりするのかな
みんな。行ったことないや」

女「キャンプ…でもあんま聞かないですよ。
家族で行くしかないから」

ジ「せやな。結婚してからやなキャンプは。練習しとくわ。
火は起こせるで。炭とかあればね（笑）」

女「そうですね。何かあったら起こせないです」

ジ「なんやるな、キャンプスキルなんやるな。
あとテント立てたりとか？」

女「ああ」

ジ「大したことないよ、あれ」

女「でも、それぐらいですよやるとしたら」

ジ「あと熊出てきたらどう対応するかとか」

女「（笑）いや、見たことないですよマジで」

ジ「話かけたらいいとか」

女「（笑）狐なら見たことあるけど」

ジ「まあ…」

女「急に出てくるって言う」

ジ「家の近くで？」

女「いや違う。普通にキャンプとか行ったら
急にぱっとライトつけたらいるみたいな（笑）」

ジ「うちの実家、いつも出てくるよ。うちのおかん
エサやってるから余計来んの」

女「（笑）それは来ますね」

ジ「ちょっと田舎なんだよね。旭川の結構はずれのほう
なんだよね。だから、川が近くにあるんだよ。
よく白鳥とかがとまるんだよね。で、結構田舎だから
キツネとか、そういうちょっと野生動物が。
あと放し飼いにされたカメとかいっぱい出てくんね」

女「えー」

ジ「ミドリガメ。縁日とかにない？こういうちっちゃいやつ」

女「あーあります」

ジ「あれがちっちゃい頃に子どもとかいたら買うやんか。

これぐらいになったりするんだよね。

で、ミドリガメの寿命って知ってる？」

女「知らないです」

ジ「85歳まで生きんねんて。だからしちめんど臭くなって

みんな川に離したりするんだよね。メツチャ増殖してる」

女「いや、それはちょっと長生きすぎるな」

ジ「そう、メツチャ長生きするんだよね」

女「亀は長生きで1000年…って確か」

ジ「実家も実際いるもん。メツチャ長い。

目つきメツチャ悪いしさ。人

殺しのような目してるんだ。生意気、ほんと生意気うちの亀。

エサやっても睨み返ししながら早くよこせよみたいな顔してくる

から、エサやりたくないな、なんかね」

女「（笑）は一」

ジ「本当になあ、あの亀。買った事ある何か？」

女「亀はないです」

ジ「犬とか猫とか」

女「いや、そういうの…何だっけ魚いましたね」

ジ「熱帯魚？」

女「熱帯魚的なやつ」

ジ「ああー難しくない？すぐ死んじゃったけど、昔」

女「いや確かに結構すぐ死にますね。

でも、結構次から次へと飼ってたから、

なんであんなに飼ってたのか分からない？」

ジ「熱帯魚を？あ、じゃあ水槽あるのちゃんとしたやつ」

女「うん、ありましたね。でも、もう今はないと思うんですけど、

なんかあったと思う・・・なんか金魚鉢みたいなの、
なんかありましたね」

ジ「金魚鉢ってこんなんやで（笑）」

女「（笑）これぐらいの魚だったから、これで2匹ぐらい」

ジ「温度調節のやつとかもあった？なんかあれ、1度でも
上がったらおれなんかは多分冬になった時に死んじゃってん。
2～3度下がっただけで死んじゃったんだよね。

こんな難しいんだと思って熱帯魚」

女「エサをあげてなくて共食いした事があります（笑）
あれ、気づいたら1匹いないんですけど」

ジ「あ、そうだ、共食いするんだよね。

金魚共食いしたことあったわ。

お祭りで買ったやつ」

女「本当にびっくりした。1匹いないんだけどとか思って」

ジ「魚すごいよね共食いとか。犬と猫は共食いをしないもんね」

女「（笑）確かに」

ジ「動物は好きなん？」

女「基本、好きですよ。犬とかは。猫も」

ジ「猫は好きじゃないの？」

女「猫よりは犬のほうが好きですけども、猫も嫌いではないです」

ジ「じゃあ猫カフェ誘えないな」

女「（笑）でも一番はうさぎが好きですけど」

ジ「あ、うさぎカフェあるんやろ？」

女「ありますね」

ジ「どこにあるの？」

女「どこなんですかね。友だちが1回行ってはるはずなんですよ。
どこにあるのかな」

ジ「なんかこの辺にあるって聞いたんだけど。

へえーどこにあるのか調べてみよか。

うさぎカフェのうさぎ飼ってたことあるの？」

女「おばちゃんの1回飼ってましたね」

ジ「うさぎカフェ・・・おばあちゃん？さっきのおばちゃん」

女「いや、違います。お母さんのほうのおばちゃんが
結構動物飼ってたんですよ。鳥とか」

ジ「南一の西一だから近くない？たぶんここだから・・・
ここ大通りだから、大通りの多分公園の接してる感じの
ところ」

女「あー」

ジ「へえー。じゃあ今度行こうか」

※こうやって断られても何回も誘っていきます。そうすることで、
距離を縮める意思表示を繰り返します。

女「(笑)」

ジ「なんで笑う！(笑)」

女「いや・・・」

ジ「でも夜、仕事7時ぐらいに終わるやる？」

女「そうですね」

ジ「うさぎ、なでなでしに行こうよ。行ったことないようさぎカフェ」

女「いや、多分そうないと思います」

ジ「猫カフェはよく行くんだよね。前は新宿に住んでいて、
東京の。あそこは猫カフェあるんだよね。
すごいよ。サラリーマンもメッチャ来るんだよ」-①

女「えー」

ジ「でなんか、仕事とするやんか。パソコンとか。ぱって
膝の上に・・・パソコンで仕事しながらなでなでする(笑)
サラリーマンとかいたりして」-②

※普段の生活の中で遭遇した面白い体験は会話ネタとしてストック
をしておくことと笑いを生むトークに使えます。自分が感じた感情は相手にも伝わります。

女「(笑) やばい」

ジ「ほんま猫好きいっぱいいるんやなと。こっちも大通りと麻布の
行ったことあるけど、さすがにそんな人いなかったから」
女「いやま、さすがにそうですね」
ジ「東京はすげえなあ（笑）」
女「癒しなんでしょうね」
ジ「癒しなんやるね。猫カフェで仕事するってどんなや（笑）」
女「いやまあ確かに。まずそこですけどね」
ジ「うさぎカフェな・・・いいな。いつも何してんの？仕事終わった
後。友だちと遊ぶ？」
女「まあ遊ぶか、何もなかったら普通に帰ってテレビ見て（笑）」
※この情報から仕事終わりだと連絡がつきやすい女性だとわかる。
ジ「テレビっ子か（笑）」
女「それぐらいです」
ジ「ほうほう。じゃ近いうち行こう、うさぎカフェ」
女「そうですね、うさぎカフェ。初の」
※声のトーンから先ほど誘ったときよりも前向きだと判断できる。
ジ「初のうさぎカフェ。おれもデビュー」
女「（笑）全く、全然・・・友だちは楽しかったって
言ってたから、楽しいんでしょうけど」
ジ「エサあげたりすんのかな」
女「そうなんですかねきっと」
ジ「なんか、食べるよ。ボボボボボッ」
※ウサギがエサを食べるポーズを真似しています。
こういう風にジェスチャーも入れた方が笑いを生みやすいです。
女「（笑）」
ジ「すごい動きするよね。ボボボボボッ・・・」
女「んん、確かに」
ジ「ペットショップのうさぎ見るの好きなんだけどな」
女「ああ」
ジ「なんか1人ぐらいいない。このでっかい図太いやつ。

何も動かないやつ、ずーっとこうやって」

女「（笑）」

ジ「結構、無趣味なんや」

女「そうですね。そんなにないですね趣味は」

ジ「好きな人できたら結構ハマりそうだけどな」

女「うーん、まあ…」

ジ「それでもないの？ハマったことない？」

女「ハマるといふか…」

50分経過

ジ「メッチャ好き好きとかならんの？」

女「（笑）あんまならないですね」

※こういう価値観の女性の方がセックスには持っていきやすいです。こちらから追うよりも追わせる方が効果的な女性だと思います。身体の関係を持ちつつ、継続的に会っていくと女性から追ってきてくれます。

ジ「そこまでハマらせてくれなかった？」

女「（笑）」

ジ「（笑）…少女漫画のような恋愛できんかったね」

女「まあ、そうですね。そんなのはないですよ。

あるわけではないと思う（笑）」

ジ「憧れたりはある？でも」

女「まあそんなに…あんま読まないですよ」

ジ「あ、そもそもない」

女「はい、あんまり…ドラマとかはよく、恋愛ドラマとか

よく見るけど、別にそれが羨ましいとかも思わない（笑）」

ジ「諦めてる（笑）」

女「これはもうドラマの世界だからみたいなの。

それでみんなキャーキャー言ったりするけど…」

ジ「結構冷めちゃう？」
女「（笑）いやまあドラマだからなーと思って」
ジ「ほー」
女「自分がそんないからみたいな」
ジ「最近ときめいてないから（笑）」
女「ほんと何もないですね」
ジ「初めて付き合ったのはいつ？」
女「初めては高校かな？」
ジ「高校1年とか・・・」
女「高校2年くらいかな」
ジ「あ、ちょっと遅めなんだ」
女「そうですね。基本、本当に男子みんな嫌いで、うち」
ジ「ああ、オトコ嫌いなの？」
女「（笑）いや、嫌いだったんですよ本当に、ガキ臭くて本当に。
ずっと先生が好きだったんですよ。小学校のころから
高校まで」
ジ「あ、同じ先生だったの？」
女「いや違うんですけど、小中高と全部違う先生なんだけど、
本当に必ず一人はいたんです。好きな先生が」
ジ「へえー。で、何かあげちゃったりとか、プレゼントとか？」
女「普通にバレンタインあげて、誕生日プレゼントもあげたり
してましたね。先生に関してはこっちから行かなきゃ
いけないなと思って」
ジ「ま、確かに（笑）。禁じられた恋やもんな」
女「（笑）」

※笑い方が最初よりもリラックスしてきて自然体になっているのがわかります。こういう細かい部分を観察することで、距離が縮まっていること、警戒心が解けてきていることもわかります。

ジ「なんかあったりした？」

女「いやでも高校の時に、最後の卒業式にアドレス聞いて、
その後に1回遊ぼってなって」

ジ「ほおー」

女「先生がライブで小樽行こうってなって…
行かなかったんです（笑）」

ジ「行かなかったの？何で？（笑）」

女「いやなんか、冷めちゃってその時には」

ジ「ああ、あくまでも先生だからよかったんだな。
芸能人みたいな感じやな」

女「なんかもう別にいいかなみたいな（笑）」

ジ「なんじゃそれ、ダメじゃん」

女「それでちょっと用事できたっていう嘘について（笑）」

ジ「先生もメッチャ期待してたかもしれんやん。
基本はめんどくさがりだ」

女「そうなんですよね。めんど臭くなっちゃって途中で。
だから…」

ジ「最低じゃん（笑）先生もしかしたら本気になってたかも
しれない」

女「結構若い先生だったんで、また。先生になったばかりの人で」

ジ「あ、その人？じゃあ23歳とか24歳？」

女「23歳でした」

ジ「じゃあほんと期待してたかもしれないよ」

女「（笑）いや、メアドはまだあるんですけどね。
でも、メールもうすることないし、もう（笑）」

ジ「ほー」

女「あんま返ってこないっていうのが本当に嫌、
もう待ってられなくて」

※基本的に女性は面倒くさがりだと思って接した方が成功率は
高まります。だから、メール（LINE）をする「頻度」「時間帯」
「返事しやすさ」が重要になります。

女「でもそんなモテてないよ。なんかナメられててみんなに。
若いから。逆になんか…うち副担だったんですよね、
うちの副担で、担任がワイルド系の先生で、
みんなそっちに惹かれてて（笑）。だから、みんななんか
好きっぽくて。いやほんと副担なんかより担任の先生のほうが
いいってみんな言ってて、だから担任の先生が部活の大会とか
で休んだ日とかは副担が来るんですけど、なんかみんな話も
聞かないし、メッチャひどくて先生可哀想だなって思ってて。
で、ずっと…」

※話は遮らないのが鉄則です。女性が主役にするのが聞き上手の基本です。

ジ「そこで、ちょっとかわいく見えたりするの？」

女「いや（笑）」

ジ「ないんや？」

女「かわいくは見えないけど、可哀想だなと思って見てたけど」

ジ「へえー。先生怖いなあ」

女「（笑）ほんとに」

ジ「できないわ」

女「まあうちの生徒…うちのクラスがひどかっただけなんですけど（笑）本当に」

ジ「あと不良クラスだった？」

女「まあまあ、そんな感じですね。不良まではいかないけど結構なガキの集まりで（笑）」

ジ「ちょっとアレや、ちょっと離れて冷めてるタイプや。

いっつも（笑）」

女「いやほんとに」

ジ「これ、現実主義者なんやな？」

女「いやまあ…ほとんどだって、うちのクラスの男子とか、
基本ホストですよ。やってたの」

ジ「ん？」

女「ホストやってたんですよ、みんな。なんか卒業してから（笑）えっ？とか思って。なんでみんなそっちの道に行くの？
みたいな」

ジ「へえ、女の子も夜入るの？」

女「夜やってる子もちょいちょいいますね。今もやってる子もいますし。元やってたという子も。けっこうだからそっち系が多かったんですよ。」

※北海道は給料が低いので、若くてルックス良い子は夜系のバイトをする男女が多いです。進学校以外の話です。

ジ「ヤンキー校だ。ちょっとした」

女「なんかもう反抗ですよ。みんな反抗するみたいな」

ジ「そのクラスだけ？」

女「いや、なんか学校がそんな感じなんで」

ジ「ほー」

女「結構バカの集まりで、やりたい放題自由すぎてほんとに。テストとかメッチャ簡単だし（笑）もうマジ、テスト対策の時、先生が答え全部教えるみたいな高校（笑）」

ジ「なにそれ？」

女「（笑）」

ジ「テストじゃないね（笑）もうだれも赤点取らないようにするために、本当に答えまで教えてまでこれはこうすればもういいからみたいな、これをこのまま暗記しろみたいな。記号の問題とかも、その記号だからみたいな感じで（笑）」

※学生時代の話などは女性の思い出が多いことが多いので、話題を深めていくと楽しい会話になりやすいです。

ジ「あ、記号も何、暗記させられんの？AとかBとか、あそういう話ね。ここは出るとかって教えるとかじゃなくて記号を教えるの（笑）やばいじゃん、それ」

女「もう本当に。このままだからとか言って（笑）」

ジ「すごいね」

女「どんだけ先生も必死。そこまでして赤点取ってほしくないの
みたいな。でもそれでも取るやつ結構いるから、
ほんとバカなん（笑）」

ジ「それ、そこまでの聞いたことないなあさすがに」

女「ほんとに馬鹿なんですよね。あれはやばかった」

ジ「なに、その先生はそういう先生だったわけ？」

女「いや、だから結構そういう先生が多くて甘いっていう…
厳しい先生はほんと厳しいんですけど、まあナメられてる
先生はナメられてたから本当にひどかったですね」

ジ「それはひどいなあ」

女「ひどい学校ですよ」

ジ「記号教えるはやばくない？（笑）」

※基本的には同調です。相手の思考や現実を破壊するのは関係が
壊れるのでNGです。同じ方向性で会話を進めていきます。
女性の考えに「こういう考えもない？」といった感じで
追加して世界を広めてあげるのはOKです。

女「本当に」

ジ「やばいなあ」

女「それで赤点とるはやばいっしょみたいな（笑）
ずっと寝てたりするんでテスト中。男子とかよくいたけど」

ジ「早く終わらしちゃってとか？」

女「いや、何もやらないの。名前だけ書いて出すみたいの。
ほんとにアホでやばいの」

ジ「そんなにやばいのは見たことないな学校で」

女「本当にやばい。勉強できる子たちも、まあいたんですけど、
その子たちはその子たちでアニヲタだし（笑）

よくいる眼鏡かけてなんかすごい…

もう同好会みたいなのあって」

ジ「アニメ同好会みたいなやつ？」

女「いやもうほんとに。放課後みんなで集まって何かやってんの」

ジ「部活みたいな作ってるの？何人かで」
女「そうなんですよね。いや、いらなっとか思った（笑）。
でも友達もいたから、それはちょっと言えなかったけど（笑）。
何がいいんだろうなと思って」
ジ「へえーすごいなあ最近は」
女「ほんとやりたい放題、あんな学校はもうないと思う、
ほんとに」
ジ「なかなかフリーだったんだ部活とか、でもあったん？」
女「いや、ありましたね、一応。一応あったけど、
多分そんな・・・」
ジ「ないの？なんか活躍してる部活とかないんだ？」
女「ないです・・・何が？野球は弱いしサッカーもそんなないし、
女バスとかですかね。多分あそこら辺が
一番活躍してた気がする」
ジ「女子のほうがパワーがあるような」
女「そうなんですかね」
ジ「ふーん。なんかやってた？」
女「何にも（笑）何もやってない帰宅部です」
ジ「帰宅部？遊んでた？」
女「高校はちょっと遊びたいなと思ってとりあえず。
でもなんか東区だったんで定期が札駅と大通り通ってたんで、
なんかもう1年の頃に毎日のように来てて、
もう遊び飽きちゃって、ほんとに今となってはもう（笑）」

60分経過

ジ「2年からどうしようみたいな」
女「本当に遊びすぎたね（笑）もうないよね遊ぶとことかなんて」
ジ「高校なあ・・・何やってたかな。メッチャ真面目で
やったけどな」

女「（笑）」

ジ「バスケットやってて、結構強かった、
まあレギュラーじゃなかったんやけど」

女「（笑）」

ジ「じゃなくても厳しいから。最初20~30人入ってきても
残るのは何人かしかいないんだよね。それだけ厳しくて。
そればっかりだな。女気ゼロ（笑）」

女「（笑）部活は・・・まあ」

ジ「そっか、まあないんや。カッコいい先輩みたく部活も
まあまあやから」

女「もうないですね。ないです。それも」

ジ「なんやー」

女「ほんとと思わなくて、何かスポーツしてるときにみんな
体育の授業とかで男子の見てカッコいいとか言うけど、
基本、毎日見るアレでしょみたいな（笑）
いやほんとに、基本アレでしょ、みたいな。
あのいつもバカやってるアイツでしょって（笑）」

ジ「あんま流されないな。そういうところには」

女「いや本当にダメなんですよね。そうなれなくて（笑）
そういう夢みるってことができないんですよ」

ジ「ああー。結構しっかりした男の人が好きなんじゃない？」

女「そうですね。結構・・・」

ジ「考え方とかしっかりしてる人が」

女「そうですね。だから年上好きだからやっぱり先生とか
好きになるんだろうなとか思って（笑）どうせ。本当に」

ジ「20代前半の先生とかいいのか。20代だったら、
そんなにしっかりしたのも少なそうだけどな」

女「でも普通に30代の先生とか普通に好きでしたから。
36歳とか（笑）」

ジ「中学校とか」

女「そうですね。なんかもう本当に。その年に見えなくて、まず」
ジ「ふーん」

女「でも普通にしっかりしてる先生だったから」

ジ「おじさんにはモテそうやし」

女「（笑）いやでもおじさんにモテた事はないです」

ジ「あんま出会えないん？ここにもたまにナンパおじさんが
いるって聞いたけど？」

女「本当ですか？分かんない、なんか。たまに…いやでもうち…
はないですね。すすきのに行っても酔っぱらってるんだ
ぐらいにしか見えないから」

ジ「あ、酔っ払いによく声かけられるんだ？」

女「よくなんか…でも、結構20代くらいの人もかけてきます
けどね。『これからカラオケ行く？』とか『飲みに行く』
とか言われて『いや、いいです』って断って（笑）
友だちといる時とか、普通にいや、いいですっつって」

ジ「行ったことないの？」

女「ないですね。いや基本かっこよくないし（笑）
かっこよくないし意味ない。なんか酔ってそうだし
怖いしいいやみたいなの」

ジ「どうだろうね酔った勢いで声かけられるのもなんか、
適当に声かけられてるような（笑）」

女「本当に、いやいいですう（笑）」

※ナンパに対するイメージはこんな感じです。

「女性への恋愛や楽しさの期待感」「安全さ」などを
与えないと上手くいきません。

ジ「まあねー」

女「だから、すすきのの夜に話しかけられるのは全部酔ってる人
だとしか思えないから、絶対付いていかないですよ（笑）
なんか1回外人にもからまれて」

※最初の頃と比べて、この辺りでは一つの質問で女性からの話が多

くなっているのがわかると思います。最初は男性側の話が多くなりますが、後々女性からの話が増えるのを目指してください。これを出会って遅くとも1時間以内に作ることができるようになると、デート初日でのセックスが簡単になります。

ジ「あ、外人いる？」

女「3回ぐらい。韓国人と…」

ジ「韓国人なんだ」

女「なんかあとアメリカ人かな？白人の人。夜に、なんかほんと夜10時、11時ぐらいにいきなり『カフェ行こ』とか言って、いやこんな時間にカフェなんてねーよとか思って（笑）すすきのだしここしかも、みたいな（笑）」

ジ「場所分かんねえよな、多分」

女「いや、いいですつって」

ジ「韓国人か」

女「韓国人もなんやる、すすきののなんか祭りときかな。なんかいきなり絡んできて」

ジ「友だちと一緒にいたの？」

女「そうなんですよ。したっけ急に絡んできて、なんかこれから何すんのみみたいな感じで言われて、いや知らねーとか思って。いや、いいですいいですつってもう（笑）ほんと、逃げましたけど」

ジ「イケメンでもなかった？」

※顔の作りよりも「楽しそう」「優しそう」「カッコいい」といった全体的な雰囲気重要です。だから、狙うジャンルの女性が好む雰囲気をファッションで作った方が成功率が高まります。

女「全然。まあなんか韓国人ぽい顔でしたよ。よくある」

ジ「アメリカ人も微妙だった？」

女「なんかオジサンでしたねそれは（笑）」

ジ「おじさん？」

女「結構おじさんでした。うちら消えた瞬間、違う女の人たちに

話しかけてたからもう… (笑) ああ、これはいいや
みたい。さすが白人とかそっち系は
そうなのかなあとか思って」

ジ「あー白人はそうだよなあ」

女「結構いろんな女の人に話しかけたりしそうだから (笑)」

ジ「白人はもう、押す、押す、押すだからな」

女「そんな白人好きでもないし、みたい」

ジ「アメリカ人の友だちとかもひたすら口説くだけみたいな感じ。
日本人とそこちゃうんやろうな」

女「あー。あんまりちょっと分かんないです」

ジ「外人はぜんぜん好きじゃないんや？」

女「そうですね、一時期好きっていうか、なんかハーフの子どもが
欲しかった時期がありましたけど (笑) かわいくて」

ジ「かわいいよなあ」

女「外人と結婚したいと思ったけど、もう別に今は (笑) …
どうせ英語できないし。どうせ英語できないから」

ジ「英語覚えればいいんじゃないの？」

女「英語、もうほんと嫌いで (笑)、学校時代から英語は…」

ジ「苦手なん？」

女「本当に。数学と同じぐらい嫌い (笑)」

ジ「得意なのなんなの？」

女「生物系は得意でしたよ。90点で普通でしたからそれだけは」

ジ「生物選考してなかったから、よく分からん。

遺伝子がどうのこうのとか」

女「ああ。物理はダメですね」

ジ「そういう計算系苦手なんや」

女「そうなんです」

ジ「おれ地学を取ってたからな」

女「あー」

ジ「地震がどうのこうのみたいな。

マグニチュード2の計算方法とか（笑）」

女「そこら辺はなかったですね、ほんとあんまり」

ジ「高校生な…戻りたいけどな」

女「まあ確かに、自由でしたね」

ジ「今のまま戻ってみたい」

女「（笑）めっちゃ自由だったなあ…今思えば」

ジ「ちょっとギャルとか多い？」

女「まあそうですね。基本なんか。化粧とか結構ケバい人多かったです。学校出てホームとか地下のトイレで化粧メッチャして、街行くみたいな」

ジ「へえー。狸小路？」

女「そうですね。結構」

ジ「狸小路に結構人集まってない？ゲーセン前とかに」

女「そうなんですよ」

ジ「あそこに集まる感じ？」

女「うちの代が一番ひどかったんですけど、今そうでもない気がする。うちらがもうひどすぎて」

ジ「毎日はしゃいどったん？」

女「ほんとに。意味もなく街にいるみたいな（笑）」

ジ「ああ、高校生ってなぜかいるよな」

女「いやーそうなんですよね。なんか用事もないのに、ただいるみたいな。結構ありましたよ」

ジ「狸小路にいたん？1年生のとき」

女「狸小路…まあそうですね。狸小路と札駅見て、で、そのまま大通り来て狸小路行ってカラオケ行ったりして遊んでました」

ジ「AAA歌ってな」

※これは言葉の選択ミスでした（笑）「みんなで踊ってた？」
いった言葉の方が自然な笑いを生めました。女性の思考にスムーズ

に処理できるようにしてあげるのが大事です。

女「（笑）うん…AAA…」

ジ「高校生のカラオケ率、半端ないもんな」

女「いやーそうなんですよね。遊ぶと言ったらカラオケみたいな」

ジ「あとあのクレープ？」

女「（笑）ああ、クレープ」

ジ「（笑）マリオンクレープやけど」

女「ありますね。たまに食べる」

ジ「カラオケ行くらいかな」

女「そうですね。基本、あと何もない。ただどこかで
たむろってって話してるだけとか」

ジ「そんなお金もないしな」

女「そうなんですよね。みんなバイトもしてないし、
そんなに（笑）」

ジ「あ、でも飲みに行ったりとかしないんか？」

女「そうですね」

ジ「人減ったないきなり」

女「うーん、誰もいなくなったね（笑）」

ジ「今日は土曜日だよ」

女「土曜ですよ」

ジ「すすきのは混んでるかな」

女「そうですね多分。晴れてるし、今日は」

ジ「結構飲むの遅いんだ？」

※ある程度、距離も縮まったと判断できるので「カラオケ」「飲み」などに移動をした方が良い段階です。基本的にダラダラ会話だけすると一気にセックスまで距離を縮めたい場合は無駄な時間であり、盛り下がります。彼女にするデートのときも同様に次に行った方が良い段階です。ただ、飲み終わっていないので移動は止めました。今回は、録音が目的で次の予定もあったので、「この段階で解散をしたい」と思っていました。

女「（笑）」

ジ「お酒とかもピッチ遅い人？」

女「いや、そうですね」

ジ「あんま水分取れない人や」

女「一気に飲むってことができない」

ジ「別にいいよ、せかしてないから（笑）ごめんごめん。

あんまお菓子屋さん巡ったりはしないのね？」

女「あんま食べれないんですよ。甘い物っていうか、

そういうケーキ系（笑）」

ジ「ご飯は？」

女「ご飯は食べれるけど……」

ジ「甘いものあんま食べれないんだ」

女「そうなんですよね。なんか頭痛くなって」

ジ「どういう事？作るのに（笑）」

女「いや、作れるんですけど、作るのは好きだけど食べるのはあんまり得意じゃなくてケーキ系は。いや、1ピースもいらなかな、みたいな（笑）」

70分経過

ジ「（笑）そんなレベルか」

女「いや、本当に。最近食べれないケーキと油もの、

とんかつとかそこらへん、あんま食べれない（笑）」

ジ「胃腸が弱ってるんじゃないか。内臓がおばちゃんのなんかな」

※「おばあちゃん」というキーワードは「おばあちゃんみたいだな！」と笑顔で強めのトーンで伝えたら笑いを生めました。ミスですね。

女「なんか本当頭痛くなるんですよ。。なんか分かんないけど。

謎のどういうことなのか分かんないんですけど」

ジ「アイスとかも食べへんのやろ」

女「アイスは好きです」
ジ「また別か（笑）難しいな」
女「ケーキはダメです。ほかは食べれます」
ジ「ほー。生クリームがダメなの？」
女「いや、生クリームが好きなんですけどね。何がダメなのかわけ
分からない」
ジ「チョコは？」
女「チョコも好きです。食べるし」
ジ「頭痛くならん？」
女「頭痛くならんし」
ジ「ケーキ食うと頭痛くなるの？」
女「ケーキになったらなんか…（笑）」
ジ「普段見てるからじゃない？それっぽいの」
女「そうなんですかね（笑）なんでか分かんない」
ジ「うーん、難しいですなあ。パフェとかもダメなの？」
女「あー微妙でちっちゃいのならまだ…」
ジ「ああ、あんま好んで食べへん。頭痛くなるから」
女「そうですね（笑）」
ジ「そういう体やねん（笑）」
女「いや、分かんない（笑）もう好き嫌いが多くて本当に」
ジ「あ、偏食なの？」
女「いやほんとに。野菜と果物しか食べれないんですよ、基本」
ジ「まあいんじゃない（笑）」
女「（笑）」
ジ「肉しか食わへんよりはいいんじゃない？健康的で」
女「いやまあね、肉もあんま脂っこいのは食べれなくて」
ジ「いいんじゃない（笑）それなら」
女「で、魚が嫌いで」
ジ「あ、そうなん？お寿司もダメだ」
女「本当に嫌いなんですよね。生物が食べれなくて」

ジ「無理なんだ、生もの」
女「そうなんですよ。みんなにえっ？て言われるけど、
『寿司とかおいしいじゃん』とか言うけど、そんなおいしいと
思ったことはないし…」
ジ「みんなさあ、行くとなると寿司とか焼肉とかって
行きたがるんだよね。両方無理じゃん（笑）」
女「でも焼肉ならかろうじてまだそんな…
いっぱい食べなきゃって話だから
食べれますけど。いやーちょっと」
ジ「なんて言われたら嬉しいの？誘われるなら
スープカレーとかは？」
女「うーん微妙ですね。それなら普通のカレーのほうが
好き（笑）」
ジ「難しいなあ」
女「そうなんですよね、なんだろうな」
ジ「何がある？イタリアンとかも結構脂っこいやろ？」
女「あ、でもイタリアンは…韓国料理好きです（笑）
辛いのが好きなんですよ」
ジ「おおー…意外なとこきたな。
韓国料理もでも肉系多くない？」
女「あとお好み焼きとたこ焼きは」
ジ「好きなん？タコキング行ったことある？」
女「いや、ないですね」
ジ「うまいよ、あそこ。おれなんかナメてたよ。
見たこと…知ってる？タコキングって？」
女「いや、なんか聞いたことがあります」
ジ「看板がなんかボロいねん。これ絶対まずいやろって
勝手に決めつけてたんだけど、
この前初めて行ったらうまかった。おれ、銀だこは
あんま好きじゃないんだよね。」

油っこくない？美味しいんだけど、あんま油っこすぎて、それだったらもうちょっと油・・・なんか揚げてんじゃん。揚げてないほうが好きなんだよね。まあ、あれはあれでおいしいんだけどね。なんかあんまたくさん食べれないんだよね。タコキング意外に美味しかったよ。とろとろ系」

女「おいしいですね。たこ焼きとお好み焼きと韓国料理ぐらいですね。嬉しいのは」

ジ「韓国料理は札幌で食いにいったことないなあ」

女「ほんとに一。なんか時々行きますね。時々行きます」

ジ「どこがうまいの？」

女「やなんか、うちの通路、テレビ塔行く地下（笑）」

ジ「札駅行く地下？」

女「テレビ塔の・・・こっこの、ここの」

ジ「オールタウンじゃなくて・・・オーロラタウンだ」

女「そう、そっちです。そっちにあるライオンって店の隣にあるんですよ。そこの隣にあって、よくビビンバおいしくて一緒に行きますね」

ジ「ビビンバかビビンバうまいなあ。チヂミとかも好きだったよね」

女「そうですね基本なんでも好きですよ。韓国料理なら（笑）」

ジ「大久保にいたときは結構食べたけどな。大久保って分かる？韓国の韓国料理屋がいっぱいあるんだよね。あそこで好きなところがあって、たまに結構行ってた」

女「一時期ほんとうに行った、韓国ハマってた時期あったんで」

ジ「韓流ビックバンみたいなアーティストとかも来て・・・」

女「そうです。それで行きたいと思ってたけど、結果行かないで、もう冷めるっていう（笑）」

ジ「ちょっと腰が重いんやな。行こうと思ったら安くない？韓国」

女「まあそうですね」

ジ「なんか見たらピーチって航空やったら往復で3,800円とかで

いけるんだよ。メッチャ安いなと思ってびっくりしたわ。
韓国近すぎ」

女「韓国って1回行きたいんですよね」

ジ「おれも行ったことないよ、韓国は」

女「ねえ、食べてみたいな韓国の韓国料理を本場の（笑）」

ジ「うまいかなあ、キムチ辛いっていうよね」

女「あーそうですね。どんだけ辛いんだろ。辛いんだけど
食べちゃうんですよ（笑）」

ジ「結構平気なんだ？あの辛さは」

女「そうですね、全然。普通に食べれます。日本のは（笑）
日本で食べるやつは全然食べれる」

ジ「どうなんやろ。おれ食べたことないから。海外行くってなって
韓国行くってならないんだよね。近すぎてさ（笑）
他んところ行っちゃうんだよね。せっかく行くなら」

女「それならハワイとかそっちとか」

ジ「他んところ行っちゃうからさ」

女「なんかないですね」

ジ「お好み焼きはどこがうまいん？」

女「どこがええか・・・」

ジ「マッカって分かる？なんか結構有名だし、
すすきのにあるんだけど、そこはまあおいしかった」

女「うち風月しか行かないんで（笑）、お好み焼きは、基本は」

ジ「ムーの子孫は、あんまりうまくなかった」

女「あ、そうなんですか？」

ジ「行ったことあるん？」

女「行ったことないんですよね」

ジ「あんまやったな。店員さん全然来てくれないし」

女「（笑）なんかそれは聞く。店員がなんかダメみたいなのがあるのは聞いたことがあります」

ジ「接客ができないんだ（笑）」

女「行ったことはないですよね」

ジ「札幌で多分一番やる気ないね（笑）あれはやる気ないなあ」

女「よくあれですよ。学生がみんな卒業式終わったあととか、よくみんなで行くってなっているんですけど、うちらはなんなかったなあ、あそこは。みんなクラスで集まる時とか、よくあそこ、結構人気なんですけどね」

ジ「高校生とか多いね」

女「そうですね」

ジ「なんか学割みたいなものがあるでしょ？お好み焼きは札幌来てからはそんなに・・・マッカは有名らしいね。おいしかった。あとタコキングも、これメッチャうまかった」

女「ああータコキング」

ジ「夜しかやってないのかなあ。今度行こうよ、じゃあ。たこ焼き。タコキングうまいぜ」

女「（笑）」

ジ「おれめっちゃ好きやねん。おれ、粉もん超好きやから、自分でも作るんだよね。お好み焼」

女「ああ」

ジ「だから、結構うるさいんやけど、あそこうまかった。意外にうまかった。今、旅行とかもあんまり行かんのよ。関西も結構行けるんじゃない？」

女「あんま行かないですね。最後に行ったのって高校のアレですね。修学旅行。大阪だったんですけど」

※「修学旅行」というキーワードが出た時点で、「枕投げ」「夜の恋愛話」「トラブル」といった引き出しを決めておくことで楽に会話を展開できます。

ジ「大阪行ったん？」

女「奈良とか大阪らへんと沖縄」

ジ「沖縄？すごいね（笑）」

女「（笑）だったんですよね」
ジ「私立？」
女「私立です」
ジ「私立じゃないと沖縄まで行かんやからね」
女「そうですね」
ジ「なんか選べるタイプだよね」
女「いや、なんか普通にみんな同じですね。で、なんかグループ
っていうかなんか1組から3組はルートが違うんですけど、
行く日とかそれに…だからアレだったんですけど、
基本、先生たちが決められたところだったんで」
ジ「自由行動ないの？」
女「自由行動は1回、大阪は1回自主見あって、
沖縄も1回夕方ぐらいにありまして、
大阪の街とUSJは自由でしたね」
ジ「え、何泊？4泊とかいくの？」
女「そうですね。それぐらい」
ジ「じゃないと、見れないよね。移動だらけで」
女「（笑）まあ楽しかったんですけど、
1回大阪で喧嘩したんですけど、班で（笑）」
ジ「何が…なんで？」
女「いやーなんか、5人ぐらいいて、
2人後ろでメッチャ遅いんですよ。
歩くのが。なんなのマジでみたいな」
ジ「それで？（笑）」
女「なんなのみたいな。そして『なしたの？』みたいな感じで
聞いたら、後ろの1人が具合悪いんだってみたいな感じで
言ってて、『いや、じゃあ早く言って』みたいな感じで
言い争い始めて。ちょっとどうしたらいいか分かんなくて、
とりあえず泣き始めて、
もうどうしようみたいな感じで…」

ジ「他の人が喧嘩してたんだな」

女「いや、ほんとに。みんなイライラし始めて、いやもうなんで大阪に来てこうなるの？みたいな。本当にやだマジで帰りたかってマジでギャン泣きした」

ジ「へえーそれは嫌やなあ」

女「いやほんとに。大阪の空気に慣れなかったらしくて、しかも道頓堀って結構どこ行ってもタバコ臭くって」

80分経過

ジ「ああ、あっち臭いねー」

女「そうなんです。それで多分具合悪くなったりしたんじゃないかみたいな。そういうのはあったかもしれないですけど、そこまでそんな大喧嘩するほどのことじゃないじゃんみたいな（笑）」

ジ「まったくもって当然でございます」

女「いや、本当に」

ジ「すごいなマジ喧嘩か（笑）」

女「本当にメッチャイライラみなしてたから、なんでここに来てこうなの？
みみたいな。普段全然仲いいのにいきなり……」

ジ「なんだろうね？」

女「ビックリして」

ジ「大阪の空気にやられたよな（笑）」

女「でもなんかその時にカメラマンさんが来て、『写真撮るよー』ってなって撮ったんですけど、さっきカメラマンさんが結構チャラチャラしたお兄さんたちが大阪の、いて、その人とぶつかったんですよね。
メッチャ舌打ちされててカメラマン（笑）えーとか思って、前見るよみみたいな感じでメッチャ言われてて、

でもカメラマンさん気付いてなくて（笑）」

ジ「（笑）」

女「でも通り過ぎていったから大事にならなくてよかったーとか
思って。うちらはもう目の前でそれ見てたから、えっ？とか
思ってたけどほんとに」

ジ「カメラマンさん鈍感やな」

※どうでも良い話だと思っても相づちを挟んであげた方が
女性は話しやすくなるので、入れてあげた方が良いです。

女「普通に『はい、いくよー』とか言って撮ってるから、あー
みたいな感じで。大阪いいけど、確かに空気は悪かった
ですね。でもその今具合悪い子、
今、道頓堀にいるっぽいですからね（笑）」

ジ「なんでやねん。働いてるの？」

女「なんかそっちに研修的なやつがあって、今…2日ぐらいから
大阪に行ってるらしくて、それで道頓堀大丈夫なのかなと
思って。1人だけど」

ジ「具合悪くならないように（笑）」

女「（笑）1人はちょっとヤバイです」

ジ「まあケンカする事はないからいいやな（笑）。

せめて具合悪いで終わるからな」

女「ほんとびっくりした。あのケンカは」

ジ「それは嫌やなー。喧嘩するの嫌やもんな。一日無駄になる」

女「それしかほんと頭になくて、大阪の研修は
全く面白くなかったな。

ケンカして終わりみたいな（笑）」

ジ「沖縄楽しかった？」

女「沖縄は楽しかったですね。そんな喧嘩もなかったし（笑）、
結構お土産見たりして…」

ジ「国際通り？」

女「そうですね。それも行って、いろいろ見たりして

楽しかったこと覚えています。でも暑くて」

ジ「暑く…何月に行ったの？」

女「でも秋ぐらいでしたよ」

ジ「ああ、10月ぐらいまで暑いよね」

女「そうですね。本当に暑くて、もう夜寝れなくて、
しかもみんなの部屋で冷房つけてるヤバいことになるから、
なんか付けるなって言われて」

ジ「どういうこと（笑）」

女「冷房つけちゃダメみたいな感じで（笑）」

ジ「どういうこと（笑）」普通に大丈夫じゃない？どう見ても」

女「いや本当に。みんな全員つけたらブレーカー落ちんじゃね？
みたいな何かよく分かんないことを先生が言ってて、
だからなんかつけちゃダメって言われてて…」

ジ「どう見ても落ちないように設定されていると
思いますけど（笑）」

女「いやほんとに。メッチャ暑くてほんと寝れなかったです。
2時間睡眠ぐらいしかしてないと思う。みんなで騒いでた。
ほんとに。でもなんか、
3人ぐらいは寝てたな部屋の…
6人ぐらい、7人ぐらいの部屋で
3人寝てるんですけど、他の…うちとか暑くて寝れないから
とりあえずYouTube見まくって（笑）」

ジ「まあスマートフォン世代だもんな」

女「とりあえずひどかった感じで」

ジ「へえ、冷房つけないって意味分からないな」

女「でも二日間だったんですけど、次の日に泊まったホテルは
全然冷房使ってよくて（笑）」

ジ「あ、メッチャボロかったのかなあ？」

女「そうなんですかねえ。でも結構…それについてよかったね。
その時は普通にその前の日寝てないから全然、

普通に寝れましたよ。しかも3人部屋とかだったんで、
全然静かに寝れた（笑）」

ジ「いいな修学旅行」

女「楽しかった」

ジ「昔過ぎて忘れちゃった」

女「（笑）でも、その所々しか…奈良はつまらなかった。
京都も行ったんですけど、お寺巡りだったんで
全く興味なかったから…」

ジ「いやーおれもそうやったな。おれも修学旅行、
京都と大阪やったんやけど、
まったく過去…今やったらまだ面白いかもしれないけど、
全然興味なかったもんなあ」

女「本当に。とりあえず何言ってるんだろうみたいなの。
とりあえずしゃべって、とりあえず雰囲気だけ写真に撮って」

ジ「そうそうそう。なんか寺光ってるなあと思って（笑）」

女「本当に。全然。へーみたいなの」

ジ「そうだよね、高校生ぐらいじゃ」

女「本当に」

ジ「おれもそうやったな」

女「それぐらいでしたね。適当に流してたなあそこは」

ジ「おれ、ご飯だけが楽しみだった」

女「うち、京都のご飯が食べれなくて、また（笑）」

ジ「なにある？」

女「なんか湯豆腐出たんですよね。うち豆腐食べれなくて」

ジ「ダメじゃん（笑）」

女「（笑）そしておかずとかも結構和食じゃないですか。
だから和食食べれないんです」

ジ「ダメじゃん（笑）」

※タイミングを早くツッコミを入れることでテンポ良くなり笑いを
取れます。

女「いや、本当に食べれるもんなくて、仕方ないから
炊き込みご飯的なものしか食べてなかった（笑）」

ジ「メチャ野菜やん。でも野菜系じゃない？煮込みがダメなの？
煮込んだ感じ」

女「いやなんだろうな和食…魚はダメだし、」

ジ「だから、味付けは苦手なの？」

女「いやそうなんですよね。あんまりおいしくない」

ジ「結構、関西系多いんじゃない？中学で京都のほうって
いったら。北海道で和食って言ったら海産物系
結構出ちゃうから」

女「湯葉、湯葉出たんですけど、湯葉って
ほんとまずくてどうしようかと思って（笑）」

ジ「（笑）こんなもん出すんじゃねーよって」

女「ほんとヤバかった」

ジ「まあ、修学旅行韓国だったらよかったなけどな」

女「それなら全然良かった。でも、全然そんな…
沖縄は嬉しかったですけど」

ジ「沖縄料理食べれた？」

女「食べましたね」

ジ「意外だね（笑）それは意外だね」

女「それは食べれたんですよ」

ジ「沖縄に泊ったら何が出るの？旅館とかで」

女「いやなんか…プレル？プレル食べてない気がする」

ジ「地元の料理？」

女「多分そうですね。あとなんか普通に…
夜ご飯とか自主見だったので
自分たちのどこかで食べれみたいな感じで…
チジミ食べました（笑）」

ジ「チヂミ？チジミある？」

女「（笑）分かんない。なんか食べましたね。チヂミ食べた。」

あとなんか・・・サラダとかなんか、よく分かんない。

なんか沖縄関係なかった気がする（笑）」

ジ「全く関係ないところ行っちゃったんだ」

女「（笑）まったく関係なかったです」

ジ「沖縄そばとかそういうのじゃないんだ」

女「それはなんか1回出ましたけどね。みんなで食べるのに」

ジ「タコライスみたいなの、それは食べれたの？」

女「ソーキそば出た気がする」

ジ「そばは食べたんだ？」

女「全然おいししかったですね。

でも普通のそば食べれないんですけど」

ジ「好みがよく分からんな」

女「（笑）いやー、本当に。変わってるんで」

ジ「ああ、沖縄じゃ、住めるね」

女「そうですね。でも、暑いからあんまりアレだけど」

ジ「でも普通でも、冷房つけるからね」

女「まあでも、普通に・・・あ、水族館も行きました」

ジ「あ、美ら海ね」

女「あれはすごいキレイだった」

ジ「美ら海キレイだよ。あのガラスのでっかいジンベイザメの」

女「そうです、そうですね。すごい大きかった。

あれは楽しかった」

ジ「なんかサメの博物館みたいのがあるよ」

女「ああ、なんかあった気がします」

ジ「美ら海ね。周りもキレイだよ、なんかね。海辺行った？」

女「行きました。すごいキレイ」

ジ「あの辺はいいなあ」

女「なんかマリンスポーツ的なのがあって・・・」

ジ「やったん？バナナボート？」

女「なんか体験みたいなやつで。そうですそうです。」

あれ、楽しかったですよ」

ジ「じゃあ海辺のホテルに泊まったの？」

女「ホテルは全然・・・多分関係ないホテル。普通のなんか・・・
なんてホテルか忘れたんですけど・・・」

ジ「那覇に泊まったのかな？」

女「たぶんそうですね。そうです」

ジ「へえー。全部そこ？沖縄に2泊いたの？全部そこ？」

女「どこだっけ2カ所でしたね。最初のところがその冷房ダメな
ところで、

2日目が冷房オッケーだったので」

ジ「それしか覚えてないんだ？（笑）」

女「そうですね。どこだったっけな」

ジ「難しいもんなんだなあ」

女「いや、そうなんです」

ジ「修学旅行懐かしいなあ。なんかふざけて京都で・・・
なんか池みたいなのところあるよね」-①

女「ああ」

ジ「そこに友だち落としちゃったのは覚えてる（笑）」-②

女「え？（笑）」

ジ「ちょっと脅かしてやろうかなあと思って

『ほっ』ってやったら、

そのままなんか驚きすぎて（笑）、

なんかチェーンみたいなのあったんやけど

そこ飛び越えて落ちてしまった（笑）。

めっちゃ先生に怒られた覚えはある」-③

※定番のセット会話。これに関しては、
話は少し盛っています（笑）

女「それはやばい（笑）」

ジ「ほんまごめんねってメツチャ謝ったわ」

女「（笑）」

90分経過

ジ「学生服とかで行くやんか。制服びしょびしょにしちゃったから。メッチャ怒られたなーほんまごめんて。覚えてるわー。それが一番の思い出だったかもしれない」

女「いや確かに、それは忘れられないですよ（笑）」

ジ「懐かしい…行くか、そろそろ」

女「そうですね」

ジ「あ、連絡先教えてよ」

※ナンパではカフェなどを挟んでから連絡先を聞くと、ほぼ次のデートに繋がってゲット率は大幅に高まります。実際カフェは15分～30分程度するだけで十分です。僕の場合「カフェ⇒カラオケ⇒ホテル・自宅」というケースが最も多いです。30分カフェ、カラオケ1時間で大体2時間程度でゲットというパターンが得意です。この子も即日ゲットできた流れだったと思います。

女「あ、はい。LINEでいいですか？」

ジ「うん、LINEでいいよ。IDとかどうしようか」

女「ID交換できますか？」

ジ「短い？」

女「短いですよ」

ジ「ああ、じゃあ言って」

女「普通に小文字で多分これで出ると思うけど」

ジ「ああ出た、目が大きいのが出た」

女「（笑）」

ジ「プリクラ出た。プリクラ…佐藤勝利って誰？」

女「SexyZoneですよ」

ジ「あ、SexyZoneも好きなの？」

女「好きですね」

ジ「佐藤勝利って…メインじゃないよね」
女「や、あの…真ん中のへん（笑）」
ジ「あ、あのイケメンか？」
女「そうですね。まあ一個下なんですけどね。
だからあんまりあれなんやな」
ジ「そこ大事なんやな（笑）」
女「でもまあ、芸能人は別だから」
ジ「届いた？」
女「はい。そうですね、なんか送ってきた…スタンプが…」
ジ「スタンプ送った」
女「ああ、来ました」
ジ「なんかトップ画の写真、ちょっと前のやからチャラいんやけど」
女「いやいや（笑）」
ジ「髪の毛が長い。黒染めしてもすぐ茶色くなるんだよね」
女「あー」
ジ「うーん、ダメだもう。かわいい系が好きなの？顔は」
女「なんかどうなんですかね（笑）」
ジ「佐藤勝利って…18歳やで」
※スマホですぐに検索して調べました
女「そうですね」
ジ「ダメだわ（笑）」
女「（笑）」
ジ「18歳には勝てない…肌のハリが」
女「いやいやいや、全然そんな」
ジ「まあでもこんなイケメンいないよな（笑）」
女「そんなー（笑）」
ジ「高校の時いなかった？」
女「全然、そんな人はいないですよ、さすがに」
ジ「1人ぐらいいた？メッチャアイドルみたいな、かっこいいの」

女「あんまいなかった気がするんですよね」

ジ「うちの学校1人ぐらいやったかなあ・・・」

女「1人いたんですね？」

ジ「1人いた。男の子ね。女の子も1人いたなあ。

このグラス割り・・・落っこちそうでなんか危ないんだよね」

女「音がしかも・・・（笑）」

ジ「（笑）行こうか。靴かわいいな。何これ？」

※靴、バッグ、アクセサリーなどを褒めるのは女性の反応も引き出しやすく「可愛い」といった風に直接的に褒めている訳でもないのに、嘘臭くなりません。今回の音声ではあまりファッションをいじっていませんが、普段は使いやすく多用しているトークの話題です。

女「去年、一昨年かな、ぐらいに・・・」

ジ「でもキレイじゃね。傷ついてないもん」

女「いや、あんまり履いてないから」

ジ「なんか花付いてる」

女「いつも楽な、ヒールないやつとかしか履かないよ」

ジ「それもでもそんな、高くない？5センチくらい？・・・東西線だからこっちかな。

優しいから見送ったるわ（笑）恩着せがましい（笑）」

女「いやいや（笑）」

ジ「休み決まってんの？平日？」

※即日でセックスを決めたり、他の場所へ移動をしたいときは「この後、予定ある？」と聞きます。「好意テスト」と呼んでいるテクニックです。その回答次第で次のステップに進みます。女性は、全く脈がなければ嘘でも「予定がある」と言い出します。逆に「予定がない」と言ってくれたら脈有りとも判断できます。

女「そうですね。4月はだいたい決まっていますね」

ジ「ああそうなんや」

女「あんまなかった。今月（笑）」

ジ「週1とか？」

※以前に出た女性の情報から回答を予測してあげます。

女「そうですね。昼に終わるから」

ジ「でも朝終わるから…ま、朝早いから」

女「お昼ぐらいには終わるんで…後なんで」

ジ「近いうち…うさぎカフェやな（笑）」

女「そうですね。マジで？（笑）」

ジ「うさぎカフェ行こ。うさぎカフェ行こう行こう…
聞いてから行きたいなと

思ってたけど、なんか一人で行けないやんか（笑）。

男一人で行くのなんか嫌やんか、うさぎカフェ」

女「一人で行ける人って勇気がありますよね」

ジ「せやな…デザート系も行けない。一人で。

カフェとかはいいんやけどな」

女「好きな人は行けると思うんですけど」

ジ「女の子が一人で焼肉屋へ行くみたいな感じだよな」

女「ああ、それはちょっと行けないです」

ジ「んー危険だよ。変な目で見られそうだよ（笑）。

一人で焼き肉屋来てたら、

多分『あの人1人だよ』みたいになるよね（笑）。

何言われるかみたいな。友だちいないんだなって（笑）。

ありがとね、ほんと。」

※感謝の言葉を伝えるのも大切です。こういう気持ち一つでも伝わるので「時間を取ってくれてありがとう」と伝えるようにしてください。

女「じゃあね、また」

※「また」「連絡してね」という言葉が出てくるかどうかも好意サインを把握するのに大切です。別れ際の態度とかでも脈有りかどうかを判断できます。この女性の笑顔の感じが「楽しかった」というのが伝わる声のトーンに

なっています。

ジ「連絡すんね。ありがとう」

<終了>